

7～12世紀の琉球列島を めぐる3つの問題

Three Issues Concerning the Ryukyu Islands
during the 7th to 12th Centuries

安里 進

ASATO Susumu

はじめに

①7～12世紀の琉球列島をめぐる研究状況

②「ヤコウガイ大量出土遺跡」の問題点

③沖縄・奄美諸島の階層社会化論の検証

④グスク文化の形成と喜界島城久遺跡群

むすび

【論文要旨】

20世紀後半の考古学は、7・8世紀頃の琉球列島社会を、東アジアの国家形成からとり残された、採取経済段階の停滞的な原始社会としてとらえてきた。文献研究からは、1980年代後半から、南島社会を発達した階層社会とみる議論が提起されてきたが、考古学では、階層社会の形成を模索しながらも考古学的確証が得られない状況がつついてきた。このような状況が、1990年代末～2000年代初期における、「ヤコウガイ大量出土遺跡」の「発見」、初期琉球王陵・浦添ようどれの発掘調査、喜界島城久遺跡群の発掘調査などを契機に大きく変化してきた。7・8世紀の琉球社会像の見直しや、グスク時代の開始と琉球王国の形成をめぐる議論が沸騰している。本稿では、7～12世紀の琉球列島社会像の見直しをめぐる議論のなかから、①「ヤコウガイ大量出土遺跡」概念、②奄美諸島階層社会論、③城久遺跡群とグスク文化・グスク時代人形成の問題をとりあげて検討する。そして、流動的な状況にあるこの時期をめぐる研究の可能性を広げるために、ひとつの仮説を提示する。城久遺跡群を中心とした喜界島で9～12世紀にかけて、グスク時代的な農耕技術やグスク時代人の祖型も含めた「グスク文化の原型」が形成され、そして、グスク時代的な農耕の展開による人口増大で島の人口圧が高まり、11～12世紀に琉球列島への移住がはじまることでグスク時代が幕開けしたのではないかという仮説である。

【キーワード】 ヤコウガイ大量出土遺跡、ヤコウガイ交易、階層社会、城久遺跡群、グスク時代人

はじめに

7～12世紀における琉球列島の社会像が大きく変わろうとしている。この期間は、貝塚時代後期後半＝先島先史時代末期からグスク時代初頭の時期で、日本本土では大和国家が成立する頃から中世が始まる時期にあたる。

20世紀後半の考古学は、7・8世紀頃の琉球列島社会を、東アジアの国家形成からとり残された、採取経済段階の停滞的な原始社会としてとらえてきた。一方、文献研究者からは、1980年代後半から『日本書紀』『続日本紀』『隋書』の「南島」「流求」関係記事をもとに、南島社会を階級社会ないしは発達した階層社会とみる見解が提起されてきた。考古学でも1990年代から、階層社会像を模索する動きがあったものの、考古学的確証を得られない状況がつづいてきた。

このような状況は、1990年代末～2000年代初期の、「ヤコウガイ大量出土遺跡」の「発見」、初期琉球王陵・浦添ようどれの発掘調査、喜界島城久遺跡群の発掘調査などを契機に大きく変化しはじめた。7・8世紀社会像や、グスク時代の開始と琉球王権の形成の見直しをめぐる議論が沸騰し、流動的な研究状況になってきたのだ。

本稿では、7～12世紀の琉球列島社会像の見直しをめぐる議論が交わされている高梨修と筆者の論考を中心に、①いわゆる「ヤコウガイ大量出土遺跡」概念、②奄美諸島階層社会論、③城久遺跡群とグスク文化・グスク時代人形成の問題をとりあげて検討する。そして、流動的な状況にあるこの時期の分析・研究の可能性を広げるために、グスク文化の原型の成立についてひとつの仮説を提起したい。

なお本稿は、安里〔2010・2011ab〕をベースにして大幅な加筆を加えたものである。

①……………7～12世紀の琉球列島をめぐる研究状況

(1) 古代の日琉境界域と貝交易

奄美・沖縄諸島では、平安時代まで「沖縄貝塚文化」または「貝塚文化」と呼ばれている漁撈・採集・狩猟・交易を基礎にした文化がつづいていた。貝塚時代前期の一時期には、沖縄諸島まで縄文文化が南下した時期もあったが、貝塚時代をとおしてトカラ列島あたりが日琉の主な文化境界だったようだ。

貝塚時代後期前半（弥生並行期）には、水稲作を基礎にした九州の弥生社会とサンゴ礁に囲まれた沖縄の島々との間に、ゴホウラ・イモガイを中心にした貝交易（貝の道）が展開した。貝交易は、文化的境界領域を越えて沖縄諸島の島々で行われていた。この交易から推定できる沖縄諸島の社会は、漁撈を経済的基礎にした小共同体に分散した原始社会である。木下尚子〔1996：p.539〕は、貝の道は、古墳時代並行期には貝に限らず、琉球と九州の人・モノ・情報をはこぶ恒常的な交通網になっていったと考えている。

7～8世紀（貝塚時代後期後半）には、大和国家がその政治的支配の外にあった九州島以南の島々

に「朝貢」を促すようになり、日琉間に文化的境界とは別の政治的境界が発生することになった。大和国家は、種子島・屋久島を支配領域に編入した後は、奄美・沖縄諸島を「南島」と呼んで異域として位置づけるようになる。その頃の南島社会については、養老4年(720)の232人の来朝と神亀4年(727)の132人の来朝が注目されてきた。多人数の代表を送り出すことができる南島社会が存在していたからだ。鈴木靖民[1987]は、8世紀の南島社会は地域によっては、原始社会から階級社会の形成へと向かう歴史的段階の入口にさしかかりつつあったのではないかとみる。山里純一[1999: p. 222]も『隋書』の流求を、王・小王・鳥丁師といった統率者が存在する階級社会と理解し、流求は、沖縄本島に比定するのが最も穏当であろうとして、そうだとすると沖縄本島は原始社会を脱し階級社会にはいつていたことが知られると述べている。

しかし、文献研究が階層・階級社会論に傾斜していく一方で、沖縄考古学では、7～8世紀の奄美・沖縄諸島を、漁撈に基礎をおいた縄文時代的な原始社会とする見方が一般的だった。筆者[安里1991a: p. 22]は、この時期の遺跡の中には、グスク的な立地の遺跡や大型グスクと重複した例もあって、単純に牧歌的な漁撈社会を想定することはできないと指摘したものの、階層社会や階級社会の存在を裏づける考古学的証拠をつかむことができなかった。高宮廣衛[1997]も、開元通宝と按司(地域領主)の出現をむすびつける議論を展開したが、多くの支持を得ることができなかった。

(2) ヤコウガイ交易論——二つの口と一つの口

このような研究状況のなかで、1990年代後半～2000年代初頭にかけて木下尚子と高梨修のヤコウガイ交易論が登場し、貝塚時代後期の奄美・沖縄社会のイメージが大きく変わっていくことになった。1991年に奄美大島の土盛・マツノト遺跡でヤコウガイが大量に出土したことを契機に、交易という経済活動を軸に階層社会化していった可能性が論じられるようになってきた。

木下[2000・2002]は、これまで、遣唐使の漂着などで偶然に琉球列島にもたらされたと考えられてきた開元通宝が、琉球列島では久米島を中心に西日本の約5倍も出土している事実を明らかにした。そして、ヤコウガイが大量に出土した遺跡の分布も、開元通宝の分布とよく対応していることや、唐では漆芸の螺鈿材料としてヤコウガイが大量消費されていたことから、ヤコウガイを求めて



図1 琉球列島の位置

渡来した唐人によって、その交易対価として開元通宝が琉球列島にもたらされたと考えた。日本でも、螺鈿の需要が9～10世紀にはじまり12世紀に飛躍的に増加して13世紀に至ることから、久米島や奄美大島のヤコウガイは、7～9世紀には螺鈿素材として主に中国と交易され、9世紀以後は奄美大島を拠点にして主に大和と交易されたと考えた。

一方、高梨 [2000・2005 : pp.149～150] は、「ヤコウガイ大量出土遺跡」という概念を設定したうえで、奄美大島の7世紀前半～11世紀前半（兼久式土器段階）の「ヤコウガイ大量出土遺跡」でヤコウガイ製貝匙の未製品や完成品が多数出土していることから、ヤコウガイ大量捕獲の動機を貝匙製作の原材確保とみる。そして、「ヤコウガイ大量出土遺跡」は奄美大島に偏在するのであり奄美一大和間のみでヤコウガイ交易はおこなわれたとして、久米島—中国間のヤコウガイ交易を全く否定するとともに、木下の研究を厳しく批判する。そして、貝匙は日本本土との交易品と推定し、螺鈿原材交易の前段階としてヤコウガイ貝匙の交易が開始されたと考える。具体的事例としては、韓国慶尚北道の池山洞古墳群（5世紀後半頃）出土のヤコウガイ製匙をあげただけだが、今後、日本本土からも発見例が出てこないとも限らないと説明する。そして、ヤコウガイ交易で入手した鉄器の

所有をとおして、奄美諸島では階層社会化が進展していったと論じている。

しかし、「ヤコウガイ大量出土遺跡」は、奄美大島北部だけでなく久米島にも数カ所存在している。筆者 [2004a] は、久米島にはより専門化していたと考えられる「大原ヤコウガイ加工場跡」（仮称）が存在することを紹介したうえで、周辺の島々や集落からヤコウガイを集積・加工し、これを唐や大和と交易してその交換物を再分配する交易システム（交易共同体）が成立していたと考えた。そして安里 [2006c] では、交易共同体内での階層社会化の進展度を測る方法として、交易で入手し消費された「ブタ」骨の分析⁽¹⁾が有効だろうと提起した。

また、高梨説の根拠の一つになっている「ヤコウガイ大量出土遺跡」の奄美諸島偏在論を検討して、ヤコウガイが大量に出土する遺跡は、奄美大島北部に偏在するのではなく久

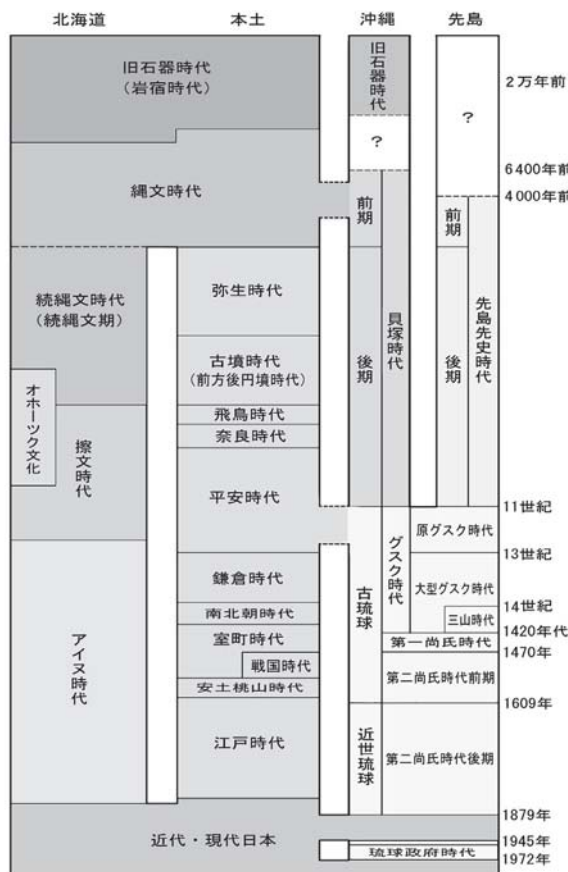


図2 琉球列島の歴史展開と本土・北海道
[安里・土肥2011より]

本土と沖縄の間に架けられたブリッジは、集団移住をとまなう交流を意味する。

米島にも集中していることを再確認し、久米島と奄美大島北部をヤコウガイ交易の「二つの口」⁽²⁾としてとらえた〔安里 2010〕。木下論文をふまえた拙論に対しても高梨〔2000・2005・2010〕は大いに批判的だ。木下・安里と高梨のヤコウガイ交易をめぐる論争の背景には、「ヤコウガイ大量出土遺跡」の認定方法、久米島の「ヤコウガイ大量出土遺跡」の存在を評価するかしらないか、久米島を中心に出土する開元通宝などの評価のちがいがあ

(3) 城久遺跡群の登場

ヤコウガイ交易論の登場から間もない2002年から、奄美大島対岸の喜界島で城久遺跡群の発掘調査が始まった。8遺跡が複合した9～15世紀の遺跡群で、大宰府の出先機関（官衙）跡ではないかと注目されてきた。以前から、この島が九州の強い影響下にあることが指摘されていたが〔池畑耕一 1998〕、城久遺跡群の発掘調査で、九州系の遺物で占められ、大規模な建物群をとまなう遺跡が存在することが確実になったのである。発掘調査を担当した澄田直敏・野崎拓司による現在までの調査結果〔澄田・野崎 2007, 澄田 2010〕を要約すると次のとおりである。

I期—9世紀～11世紀前半。九州系土師器・須恵器・越州窯系青磁・白磁・灰釉碗陶器などが出土し、奄美の兼久式土器はわずかである。遺構は火葬墓のみで、建物遺構もほとんど検出されていない。

II期—11世紀後半～12世紀。出土遺物が最も多い。九州系土師器・須恵器・白磁・初期竜泉窯青磁・同安窯系青磁・初期高麗青磁・朝鮮系無釉陶器・滑石製石鍋・滑石混入土器・カムイヤキなどが出土。庇付大型建物・掘立柱建物・倉庫などの規格性の高い建物群、土葬・焼骨再葬・火葬が確認されている。とくに初期の滑石製石鍋が大量に出土する。

III期—13世紀～15世紀。口禿白磁・ビロースクタイプ白磁・竜泉窯系青磁・青花・カムイヤキが出土する。滑石製石鍋は激減する。

この調査で明らかにされた重要な点は、I期は九州系遺物で占められているが建物遺構はほとんど検出されていないこと、I期とII期との間には大きな文化的転換があり、II期は琉球列島のグスク時代的な遺物構成に変わり、大型建物群も登場して城久遺跡群の最盛期になるという点である。

この遺跡の評価について、考古学側からの主な見解を整理するとつぎのようになる。

9世紀に、奄美文化圏のなかに突如として九州系遺物を中心にした城久遺跡群が登場する。池田榮史〔2005:p.145〕は、この発掘調査で喜界島に大宰府の出先機関があった蓋然性がますます高まったと強調する。これに対し、中島恒次郎〔2010:p.139〕は、外来者の居住地の色合いが濃い、大規模な建物群はII期（中世）のものであり、また官衙的配置ではなく大宰府の出先機関を根拠づけるまでには至っていないと指摘している。これは現在の大方の見方であろう。また、新里貴之〔2010〕は、I期の日常生活の炊飯具（土師器甕）には南島の要素があることから、九州系集団だけでなく喜界島在来集団もいたことを示唆している。高梨〔2007:p.67〕は、九州系土師器が、奄美大島北部でも少量出土していることを根拠にこの地域に「喜界島・奄美大島勢力圏」を設定しているが、これはつぎで紹介する文献研究の見方と対立する。

第II期の11世紀後半以後は、遺跡の性格が大きく変わり、12世紀にピークを迎える。遺物などからみると、奄美・沖縄諸島のグスク文化圏の遺跡と共通する内容になる。狭川真一〔2008〕によ

ると、いったん埋葬した遺骨を掘り出して火葬する「焼骨再葬」という独自の習俗も登場する。中島〔2010：pp.133～137〕は、この時期の建物143棟を専有面積で分類して、少数の大型建物居住者と多数の小型建物居住者に2極化していることを指摘する。大型建物群の性格については、大宰府ではなく中世の居館的建物配置との比較が必要だとする。

鈴木康之〔2007・2008：p.224〕は、高麗・宋の陶磁器や大量に出土する滑石製石鍋から、博多を起点に中国・朝鮮・日本をネットワーク化して交易する宋商人が大きく関係していると考え、新里克人〔2004：p.345〕も、琉球列島への石鍋の流通や、徳之島へのカムイヤキ陶器窯の導入にも、宋商人が関与した可能性が高いとみる。赤司善彦〔2007：p.131〕は、カムイヤキ陶器窯には高麗陶器の製作技術が直接伝わった可能性が高く、その生産主体は日本・高麗・宋の東アジア交易の中で伸長してきた奄美地域の有力な勢力ではないかと考えている。

城久遺跡群の第Ⅱ期は、第Ⅰ期のような日本勢力一極だけでなく、宋商人や高麗陶工がかかわる多極関係のなかで独自化（琉球化）していく時期と考えられる。

(4) 「移植された中央」から異国へ

文献研究者による城久遺跡群の評価は下記のとおりである。

村井章介〔2010〕は、初期の城久遺跡群について、周囲の社会から隔絶した中央直結型の生活を送っていたらしいとして、「境界空間に浮かぶ『島』のような場であり、『移植された中央』と呼んでよいのかもしれない」（p.8）と述べている。鈴木靖民〔2008：p.43〕は、大宰府官人や九州の在地勢力が城久遺跡群の担い手で、喜界島に使者を駐在させ、島々の生産・流通を掌握する役割を負い、朝貢を促す存在として描いている。2009年に法政大学で開催されたシンポジウム「古代末期の境界領域——石江遺跡群と城久遺跡群を中心に——」では、城久遺跡群のこうした性格が、北の境界領域に存在する律令的とされる石井遺跡群（青森県）と大きく異なる点とされた。

10世紀末以降の日琉境界領域をめぐる文献研究では、「南島」に代わって登場するキカイガシマに関心が寄せられてきた。「貴駕島」「喜界島」「鬼界島」などと表記されたキカイガシマは、個別島名ではなく、南の島々の総称とされてきた。

キカイガシマについては、『日本紀略』長徳4年（998）の「貴駕島に南蛮を捕へ進むべきの由を下知す」という記事が目ざされている。これは、その頃に南蛮人（奄美人）が、大宰府管内の筑前・筑後・薩摩・壱岐・対馬・大隅などを襲撃して人や財物を略奪したことなどに対して、大宰府が貴駕島に南蛮の追討を下知した文書である。

鈴木靖民〔2007：pp.22～23〕は、この記事について、8世紀以後古代国家側の記録から消えていた南島の島々が10世紀末に再登場したときには、往時とはまったく様相を異にしていたと指摘する。そして、10世紀最末～11世紀初めにおいて、喜界島と奄美大島などが一括りにできる状況になく、併存ないしは対抗関係にあったと考えている。永山修一〔2007：pp.163～164〕も、キカイガシマは奄美大島と区別された大宰府の下知を受ける存在で、その最有力候補が喜界島で、大宰府の出先機動的なものがあつたとみる。村井〔2008：p.98〕も、奄美大島と喜界島が「日本国」の支配とのかかわりでは対照的な位置に置かれていたとする。これらは、古代末期に喜界島と奄美大島との間に対抗的な政治的境界があつたと考えるもので、さきに紹介した高梨が設定した「喜界島・奄美大

島勢力圏」とは対立する見方といえる。

田中史生 [2008: pp. 62～63] は、城久遺跡群のⅠ期からⅡ期への移行期に空白期間があるとみて、この空白期が奄美人の大宰府管内への乱入時期にあたることに留意して、大宰府管下のキカイガシマが、交易者らとの関係を深めた奄美人との対立に追い込まれるなかで機能低下をきたしたとみる。そして、城久遺跡群のⅡ期への発展は、この地域の交易世界が再組織化されたことを示唆していると考ええる。

永山 [2007: p. 162] は、10世紀末に日本の内側にあったキカイガシマは、11世紀でも『新猿楽記』に書かれているように西の境界領域として認識されていたが、12世紀初頭には、紀伊国に到着した喜界島の者が宋人や高麗人と同じ扱いを受けたとみられる事例（『長秋記』天永2年条）などから、日本の外の異国として位置づけられるようになったと指摘する。そして、永山 [2008: p. 131] では、11世紀は日本の対外関係に大きな変化が現れる時期にあたり、キカイガシマが異国として位置づけられていく時期と城久遺跡群のⅠ期からⅡ期への変化が対応していること示唆している。

12世紀に日本の異国となったキカイガシマは、文治3年（1187）の源頼朝の征討を受けて再び日本の領域内に組込まれることになった。そして、13世紀後半から14世紀に、日本の支配が奄美諸島にまで及ぶようになると、これと連動して城久遺跡群も13世紀以降に衰退期を迎える。

(5) グスク時代の開始年代

グスク時代の開始年代について、最近では11世紀後半に定着した観があるが、この年代観に至るまでにはつぎのような議論があったことを確認しておきたい。

グスク時代の開始期については、1970年代後半～2000年代初頭まで12世紀説が定説だった。その根拠は、1978年に発掘された恩納村熱田貝塚の発掘調査報告 [金武1982] である。安里 [1987] は、グスク時代の開始について、城塞的グスクに先行して登場する徳之島の亀焼窯（カムイヤキ陶器窯）とグスク土器の出現でとらえるべきだと提起した。そして、恩納村の熱田貝塚から出土した石鍋A群（縦耳付き石鍋）を模倣したグスク土器の出現年代について、森田勉 [1983] による石鍋編年の石鍋A群盛行期（10～11世紀）をグスク土器の出現年代にあてはめた。また、カムイヤキについてもグスク土器との共伴関係から、11世紀に遡る年代を想定した。

安里 [1989・1991: p. 74] では、熱田貝塚の石鍋A群模倣土器の年代について、森田 [1983] が石鍋A群の出現年代を9世紀に遡る可能性もあると述べていることをふまえて、つぎのように論じた。「熱田貝塚の石鍋は森田氏の石鍋A群に相当し、鏝付石鍋であるB群は出土していない。だから、その年代は少なくとも石鍋B群盛行期（12世紀）以前で石鍋A群盛行期（10～11世紀）ということになる。森田氏によると石鍋A群の出現年代は9世紀末よりさらに遡る可能性があるから、ここでは熱田貝塚の石鍋A群の年代に9世紀～11世紀の幅を持たせて『10世紀前後』と表現しておきたい⁽³⁾」。

筆者の提起に対し、熱田貝塚の発掘調査を担当し、熱田貝塚のグスク土器を12世紀に位置づけていた金武正紀 [1989] から、熱田貝塚の石鍋A群は「11世紀末～12世紀前半」で、10世紀前後ではありえないとする反論があった。その後、石鍋について木戸雅寿 [1993] が、木戸Ⅱ類（石鍋A群）を11世紀中葉～末、木戸Ⅲ類（石鍋B群）の出現を12世紀初めに位置づける新たな編年を提

起した。また、カムイヤキ陶器窯の放射性炭素年代が11～14世紀代と測定された〔新東ほか1985〕。これらの成果をふまえ、筆者〔1996〕は、グスク時代の開始期を石鍋B群（木戸Ⅱ類）が出現する以前の「10世紀ないしは11世紀」とし、さらに、安里〔2002〕では、「『安里説＝10世紀』として誤読されている」と指摘したうえで、「木戸雅寿の石鍋編年を参考にして、琉球列島への縦耳付き石鍋流を11世紀（誤解がないようにいえば11世紀のある時期）とみるのが妥当」（p.167）とした。

残念ながら拙論は評価されることなく、グスク時代開始12世紀説が2000年代初頭まで沖縄考古学の主流でありつづけた〔たとえば金武2001、高宮2001・2002、安里嗣淳2003、仲宗根2004など〕。

しかし、2002～2009年に実施された城久遺跡群の発掘調査で、城久遺跡群のⅡ期には縦耳付きの石鍋A群のみが大量に出土することが明らかになったことから、グスク時代の開始——縦耳付き石鍋の琉球列島への流通、カムイヤキ陶器窯の出現、グスク土器の成立——を11世紀後半に位置づける見方が有力になってきた。グスク時代の開始年代について、最近の調査・研究成果を整理した新里克人〔2010〕は、グスク時代の開始年代を11世紀後半代に位置づけている。縦耳付石鍋は、10世紀前後に出現して九州の都市・官衙・寺院などで使用され、11世紀後半～12世紀前半に一般集落にも広がることから、琉球列島への流通も11世紀後半～12世紀代とみる。また、縦耳付石鍋とともに琉球列島に流通した徳之島カムイヤキ陶器窯の出現年代は11世紀後半、南宋の白磁（玉縁口縁白磁碗）も11世紀後半～12世紀と考えている。

（6）グスク時代の開始・琉球王権の出現・日本勢力南漸論

土肥直美は、1990年から琉球列島の古人骨の調査研究を精力的に積み重ねてきた。その成果をふまえて、筆者との対談〔安里・土肥1999〕で、形質人類学の立場からグスク時代を境にしてヒトの形質が変化したことを、最初に指摘した。⁽⁴⁾ 筆者もこの対談で、土肥の研究をとおして、グスク文化の形成期には、文化的に日本の影響を強く受けただけでなく日本本土から様々な人たちが渡来して、在来の南島人（奄美沖繩諸島の貝塚人や先島諸島の先島先史人）と混血しながらも、渡来人の形質を受け継いだ人たちを中心に人口が増大して農耕集落が各地に形成されていった可能性が高いことを提起した。

しかし、日本のどこから、なぜ移住してきたのかについては、まったく手がかりがつかめなかった。一方、土肥は、先史時代から近世琉球にいたる琉球列島出土の人骨データを着実に蓄積し、グスク時代人が、南島人の形質を残しながらも中世日本人の特徴をもっていることを実証してきた（本論④参照）。

琉球王権の出現については、初期琉球王陵である浦添ようどれの墓室発掘調査〔浦添市教委2005〕で大きな成果があった。この調査では、王族の骨の形質やDNA分析、洗骨や火葬の風習、墓の立地や構造、石厨子（石棺）の材質や彫刻様式、高麗系瓦の分析などから、琉球王権の形成には、日本人だけでなく朝鮮人や南中国人も深く関与していたことがあきらかになった。安里〔2008：p.100・安里2011b：pp.154～157〕では、モンゴル・高麗連合軍によって1373年に滅ぼされた三別抄の残党が関与した可能性についても言及した。

以上は、城久遺跡群の発掘調査全容が明らかなる前の、グスク時代の開始と琉球王権の出現をめぐる研究状況である。

そして、城久遺跡群の全体像が判明すると、この遺跡群がグスク時代を開始させた日本側の基地であることがあきらかになってきた。城久遺跡群のⅡ期の成立期がちょうど琉球列島のグスク文化形成期（11～12世紀）にあたり、また、城久遺跡群がⅢ期にはいと衰退していく一方で、沖縄島では英祖王権が登場する。そこで、城久遺跡群と奄美大島を中心にした日本勢力が、琉球列島に南漸してグスク時代を開始させ、政治的社會を形成したと提起して、城久遺跡群を中心にした勢力による琉球王権の形成を示唆したのが高梨である。

高梨が、ヤコウガイ交易をとおして城久遺跡群と奄美大島北部に「喜界島・奄美大島勢力圏」が形成されたと想定していることは先に紹介したが、その存在について高梨は、「後に国家形成にいたる沖縄本島の動態に先行するものとしてきわめて注目される」[高梨2005:p.208]と述べている。また、高梨[2009]では、「琉球弧では、11世紀代～12世紀代にかけて、喜界島の城久遺跡群を機軸とする人間集団の南漸が発生していた」(p.119)と結論づけた。具体的には、「交易拠点となる地域を中心に、周辺へ拡散の波及を繰り返したと考えられる。各島嶼に城久遺跡群のような非在地的要素を備えた拠点の遺跡が存在していた可能性を考えなければならないが、(中略)おそらく沖縄諸島・先島諸島における拠点の遺跡の出現こそは、当該地域における政治的社會の形成をもたらしたにちがいない」(p.118)と想定している。九州勢力が南下して成立した喜界島・奄美大島勢力圏が、さらに南漸して琉球王国を建国する征服王朝的なストーリーを考えているようにみえる。琉球王国の倭寇建国論を展開している吉成直樹[吉成・福2007, 吉成2010]も高梨と同様な展望をもっているように思われる。

筆者は、城久遺跡群が、琉球列島のグスク時代の開始や琉球王権の形成に大きな意味をもつことを最初に指摘したという点で高梨説を高く評価したい。しかし、グスク時代の開始と琉球王権の出現の問題は、日本勢力南漸論で説明できるほど単純ではないとも考えている。まず、琉球列島のグスク時代開始の基地となった城久遺跡群第Ⅱ期の勢力は、第Ⅰ期のような日本勢力だけではなく、宋商人や高麗陶工もかわり、文化的にも独自化（琉球化）しはじめた集団であった。また、日本勢力南漸論は、支配者層の移動ないしは征服に重点を置いた議論のように受け止められる。

たしかに、高梨が想定するような城久遺跡群からの支配層の移住があったと思われる。しかし、琉球列島では、グスク時代の開始とともに島々で農耕集落が急速に増大していくことから農耕集団の移住もあったことは確実だと考えられるが、日本勢力南漸論ではこの問題が考慮されていない。この点が、筆者が1990年代から論じてきた日本人集団の移住論と大きく相違する点である。

また、沖縄諸島の貝塚時代後期社會が階層社會化していたとすれば、琉球王権形成に貝塚人の系譜をひく在地首長たちの関与があったのか否かの検証も今後の重要な課題になる。沖縄諸島における貝塚時代後期社會の階層社會化は解明途上の問題だが、貝塚時代後期遺跡が城塞のグスクへと展開していく事例——とくに、勝連グスクのように貝塚時代後期遺跡が大型グスクへと発達していく事例の存在は無視できない。

そして、浦添ようどれの調査で明らかになった、初期琉球王権形成への高麗や南中国との血の交流を含めた関与があったという事実もある。グスク時代の開始と琉球王権の形成の問題は、日本勢力南漸論で単純化せずに、多様な可能性を念頭に置いた調査・研究が必要だと思う。

②……………「ヤコウガイ大量出土遺跡」の問題点

(1) ヤコウガイ交易論争の争点

ヤコウガイ交易をめぐる高梨—木下、高梨—筆者の間で論争がおこなわれているが、高梨は、その争点について、つぎのように整理している。高梨[2005]では、「ヤコウガイ大量出土遺跡の分布についても、琉球孤全域に満遍なく認められるとする木下尚子や安里進と奄美諸島を中心に偏向した分布が認められるとする筆者や島袋春美等⁽⁵⁾では、事実認識に相当の開きがあるが、ヤコウガイ大量出土遺跡が奄美諸島に集中して分布する事実は動かしがたい。」「奄美諸島におけるヤコウガイ大量出土遺跡には、大陸と直接交流を示す考古資料はほとんど認められず、依然として九州地方と交流を示すものが多数含まれている。そうした遺跡の実態は、木下尚子や安里進が述べるような琉球孤と大陸の交易という理解論で簡単に片づくものではない」(pp.182~183)という。

また、高梨[2007]では、「古代並行段階のヤコウガイ交易論は、想定する地域から、筆者による

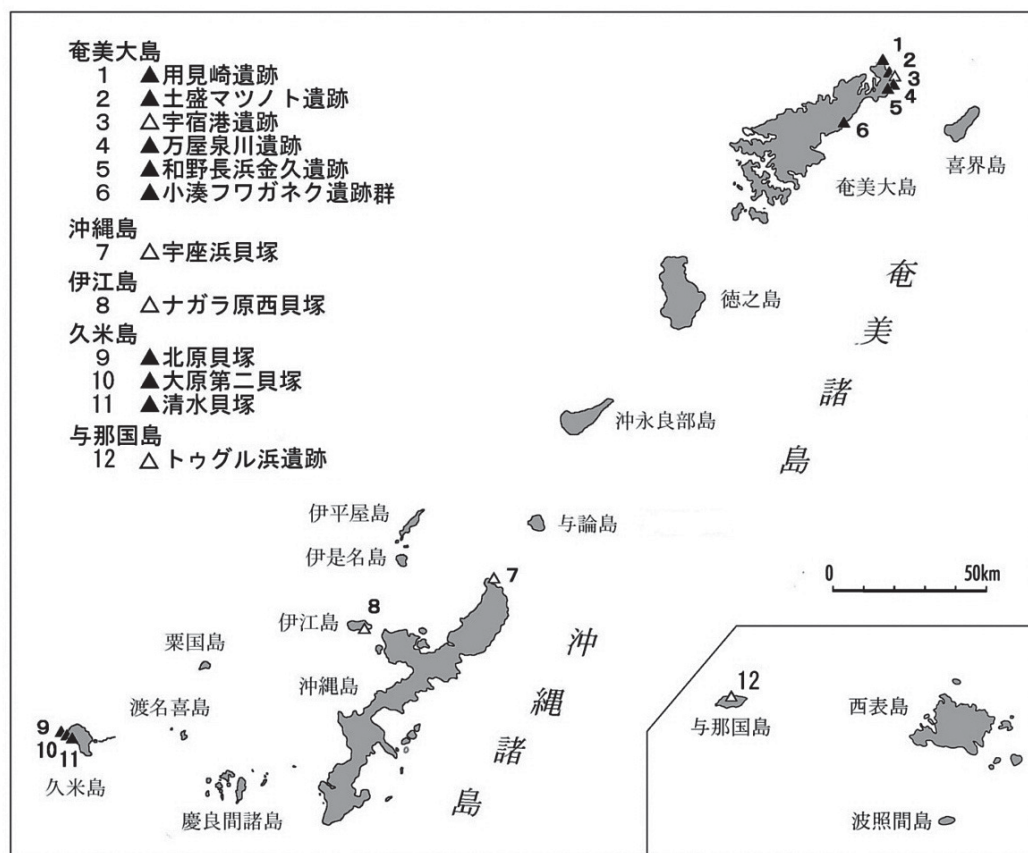


図3 「ヤコウガイ大量出土遺跡」とヤコウガイを大量に出土した遺跡の分布

▲は「ヤコウガイ大量出土遺跡」、△はヤコウガイを大量に出土した遺跡。「ヤコウガイ大量出土遺跡」は高梨[2005]、島袋[2004]による。ヤコウガイを大量に出土した遺跡は表1による。

『対日本交易論説』と木下による『対中国交易説』に整理できる」(p. 65)と述べている。

しかし、高梨のこの論点・争点の整理は、木下や筆者の論文を正しく紹介していない。木下や筆者は、奄美大島北部に集中する「ヤコウガイ大量出土遺跡」に象徴される奄美と大和のヤコウガイ交易を認めたとうえで、久米島を窓口にした中国とのヤコウガイ交易も展開していたと考えている。また、筆者は「ヤコウガイ大量出土遺跡」が「琉球弧全域に満遍なく認められる」と論じたこともない。「ヤコウガイ大量出土遺跡」が奄美北部と久米島の両地域に集中・偏在していることを前提に論じているのである。池田[2006]も、安里は「ヤコウガイ大量出土遺跡」が琉球列島全域に出現するという所論を発表したと紹介して拙論を批判しているが、これには二重の誤読がある⁽⁶⁾。

「ヤコウガイ大量出土遺跡」について、高梨[2002・2005]では、奄美大島5例、久米島2例(清水貝塚、北原貝塚)をあげているが、島袋[2004]は、奄美大島4例、久米島3例(清水貝塚、北原貝塚のほか大原第二貝塚を加える)を認めている。高梨[2005]によると島袋は、「筆者[高梨：安里注]の遺跡分類を参考にしながら琉球弧におけるヤコウガイ大量出土遺跡を上げている」(p. 220)ので、島袋が認定した久米島の3遺跡は高梨も承認していると考えておく。

筆者と高梨は、奄美5遺跡・久米島3遺跡という「ヤコウガイ大量出土遺跡」の分布についての共通認識に立ちながらも、筆者は奄美大島北部と久米島にヤコウガイ交易の窓口を考えたが、高梨[2002]は、「ヤコウガイ大量出土遺跡」の分布は奄美大島に「偏り」[高梨2002:p. 138]、「著しく偏る」[高梨2004:p. 277]、「奄美諸島を中心に偏向した分布」[高梨2005: pp. 182～183]と評価して、ヤコウガイ交易の窓口は奄美大島北部のみだと主張している⁽⁷⁾。

つまり、貝塚時代後期後半のヤコウガイ交易の窓口は、高梨が主張するように〈奄美大島北部—大和〉という一つの口だけか、それとも木下や安里が考えるように〈奄美大島北部—大和〉と〈久米島—隋・唐〉という二つの口なのかという問題なのである。したがって主要な争点は、〈奄美北部—大和〉の口は双方が認めているので、〈久米島—隋・唐〉の窓口を考える木下や筆者と、これを全く認めない高梨ということになる。そして、この争点を生み出している考古学的事実をめぐる問題点の一つは、上述した「ヤコウガイ大量出土遺跡」の分布の評価の違いであり、もう一つは「ヤコウガイ大量出土遺跡」の認定の問題、つまり概念規定の問題である。

(2) 「ヤコウガイ大量出土遺跡」概念の検討

高梨は、「ヤコウガイ大量出土遺跡」を久米島に2遺跡(島袋によると3遺跡)を認定しながらも、久米島の存在意義については全く評価しない。奄美大島と久米島の「ヤコウガイ大量出土遺跡」は、いったい何が異なるのだろうか。そこで、改めて高梨のいう「ヤコウガイ大量出土遺跡」はどう規定されているのかを検討したい。

「ヤコウガイ大量出土遺跡」の特徴について、高梨[2000: pp. 234～235]は、「最大の特徴は、文字通りヤコウガイ貝殻の大量出土である」、「異常とも思われる個体数が出土する」、「単なる食料残渣の廃棄であるとは到底考えられない。そうした出土状態に認められる特徴こそ、遺跡類型化の判断基準ともなるのである」と述べている。問題は、「ヤコウガイ大量出土遺跡」の類型化の基準となる「大量出土」の数量的基準が示されていない点である。「異常とも思われる個体数」からイメージされるのは、他の遺跡に対し群を抜く突出した個体数だが、実際はどうだろうか。高梨は、「ヤコウ

「ガイ大量出土遺跡」の概念規定について、奄美諸島・沖縄諸島のヤコウガイ貝殻・製品出土数量の集計データにもとづいた根拠を提示していないので、木下が集計したデータで分析してみよう。

表1は、木下〔2000〕が集計したヤコウガイを50個以上出土した遺跡データから、貝塚後期に相当する遺跡を抜き出した表である。貝殻数・蓋製品数・殻製品数の合計は筆者の計算によるものである。表は合計数量順に並べ、これをグラフ化した(図4)。

表1 ヤコウガイを50個以上出土した貝塚後期相当期の遺跡

島名	遺跡名	時期	貝殻数	蓋製品数	殻製品数	合計
久米島	清水貝塚Ⅱ層	前半	1953	724	37	2714
与那国島	トゥグル浜	後半	1529	446	0	1975
奄美大島	フワガネク	後半	約800	約40	約60以上	900以上
久米島	清水貝塚Ⅲ～Ⅳ層	後半	576	319	5	900
奄美大島	用見崎	後半	222	15	23	260
久米島	北原貝塚Ⅰ層	後半	206	72	8	286
奄美大島	マツノト	後半	158	12	62	232
久米島	大原第二貝塚B地点	前半	147			147
伊江島	ナガラ原西貝塚	前半	105		45	150
沖縄本島	宇座浜貝塚	前半	44	51	25	120
奄美大島	宇宿港	前半	5	108	4	117
奄美大島	長浜兼久Ⅰ	後半		180	145	325

〔木下2000から作製〕

ト遺跡の出土量を「大量出土」の基準値にすると、ナガラ原西貝塚から宇座浜貝塚まで際だった数量差は認められなくなり、高梨基準による「ヤコウガイ大量出土遺跡」は、奄美大島に「偏在」するどころか奄美諸島から八重山諸島まで「満遍なく分布」するというようになってしまう。高梨は、土盛・マツノト遺跡は「ヤコウガイ大量出土遺跡」だが、宇座浜貝塚・ナガラ原西貝塚・与那国島

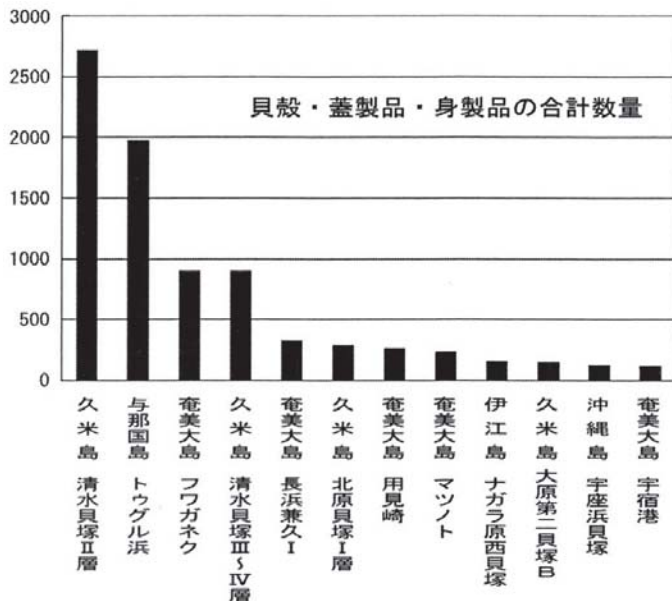


図4 貝塚後期相当遺跡のヤコウガイ出土数量

〔木下2000から作製〕

まず図4から指摘できることは、①最も出土数量が多いのが久米島の清水貝塚で、次に与那国島のトゥグル浜遺跡、そして奄美大島のフワガネク遺跡の順になり、出土数量では奄美大島が特段多いわけではない。むしろ、高梨がその存在意義を評価しない久米島と与那国島が群を抜いて突出している。②高梨が「ヤコウガイ大量出土遺跡」に認定した奄美大島の土盛・マツノ

ト遺跡などでは大量に出土していても「ヤコウガイ大量出土遺跡」ではないことを説明する必要があるだろう。

高梨が「ヤコウガイ大量出土遺跡」の基準にした「異常とも思われる個体数」や「大量出土」が客観的データに裏付けられていないことがわかる。「異常」とか「大量」という感覚的な把握の仕方に、「ヤコウガイ大量出土遺跡」が奄美大島北部に多いことは強調するが、久米島の「ヤコウガイ大量出土遺跡」の存在は全く評価しないという理解が生ずる余地があると考えられる。

(3) 高梨の反論について

上記の「ヤコウガイ大量出土遺跡」の定義についての疑問は、安里 [2010] で提起したもののだが、高梨 [2010] はこの疑問に答えて、「『大量』概念の数量化については、出土状態と相対的比較が重要であり、数量的基準は設けていない。出土状態と相対的比較で判断すればよいことである。貝塚の認定、定義に貝殻の出土量の数量的基準を設けるようなものである」(p.115) と述べている。また、高梨説を擁護する吉成直樹 [2010] は、「出土するヤコウガイの数量という連続的な値で区分しても恣意的な分類にしかならず、明らかにヤコウガイをストックしているという明確な意図が認められない限り、ヤコウガイ大量出土遺跡と認めるべきではないという考えに落ち着いたと認識している」(p.49) と説明している。

たしかに貝塚の定義に貝殻の出土数量の基準は不要だが、たとえば「巨大貝塚」という概念を設定した場合には「巨大」の数量的定義が必要なる。同様に「ヤコウガイ大量出土遺跡」という概念を設定し、これを共通概念として提案するからには「大量」の客観的規定が必要だ。そうしないと、人によって(基準の置きようによって)「出土状態と相対的比較」の理解は異なり、議論が成り立たなくなる。そのための共通理解の方法のひとつが数量化つまり定量化である。考古学の方法は、「ヤコウガイをストックしている明確な意図」を客観的にとらえるために、連続的な数値資料にあえて区切りをつけて定量化したうえで、これを分析する作業努力をするのである。定量化は、科学的分析方法の基本だと思う。

しかし、貝殻や製品の出土数量は、遺跡の規模や存続年数、発掘調査の面積や土量などにも大きく左右され、客観的基準値とするには問題が付きまとう。木下 [2006] は、奄美大島の「ヤコウガイ大量出土遺跡」とされる3遺跡について、1 m²あたり平均2個以上のヤコウガイが出土していることを指摘している。「ヤコウガイ大量出土遺跡」を客観的に評価し、共通概念とするためにはこうした定量化の作業が必要だろう。

(4) 久米島の「ヤコウガイ大量出土遺跡」をめぐる論点

「ヤコウガイ大量出土遺跡」の定義に問題はあるが、高梨も筆者も、久米島にも「ヤコウガイ大量出土遺跡」が少なくとも2例(島袋は3例)存在していることを認めているから、久米島でもヤコウガイ交易がおこなわれていたことは、筆者や木下と高梨の共通認識である。高梨は、久米島のヤコウガイ交易も奄美大島を媒介にした大和との交易のみで解釈し、筆者や木下は隋・唐との交易と考えている点が大きく相違している。もちろん、筆者も木下も久米島—大和との交易を否定しているわけではない。

久米島は、地理的には沖縄諸島では最も中国に近く、中・近世をとおして琉中交通の窓口の島だった歴史的事実がある。そして、奄美・沖縄諸島では、8世紀以前の中国貨幣(五朱銭・開元通宝)の出土枚数が最も多いのが久米島で、逆に最も少ないのが奄美大島だという事実もある。知念勇[2004: pp.271~272]によると、開元通宝の表面採集を含めた出土枚数は、奄美・沖縄諸島49枚中44枚は沖縄諸島出土で、うち14枚が久米島出土である。奄美大島では用見崎遺跡出土のわずか1枚にすぎない。開元通宝に先行する五朱銭の出土枚数も、沖縄諸島出土の13枚中12枚が久米島の出土だが、

奄美諸島での出土事例はない。五朱銭は、九州全体でもわずか1例だけである。開元通宝も、木下[2000:p.188]の集計では九州全体では12枚+「多数」(十三行遺跡)で、九州全体と比べても沖縄諸島なかんずく久米島で突出して多い。

知念[2004]は、上記の事実をふまえて「五朱銭や開元通宝などの出土地を見ると、漢代から唐代にかけて南島を経由して北上した中国船の存在を考えねばならない」(p.274)と述べている。漢代にさかのぼる久米島と中国の交易の延長線上で、久米島の五朱銭や開元通宝、そして「ヤコウガイ大量出土遺跡」を理解するのが筆者や木下であり、沖縄側の一般的な見方でもあると思う。

これに対し、久米島のヤコウガイ交易も、奄美大島を媒介にした大和との交易の末端に位置づけるのが高梨である。高梨は、奄美はヤコウガイ交易で多くの鉄器を入手したと考えている。たしかに、鉄器の出土数は奄美大島が最も多いので納得できる。しかし、久米島のヤコウガイ交易が奄美大島北部と大和との交易の末端に位置していたとすると、なぜ、鉄器は奄美大島で最も多く出土するが、開元通宝は奄美大島で最も少なく末端の久米島で突出して多く出土しているのかを合理的に説明する必要がある。とくに五朱銭は、九州全体でも1枚の出土しかなく奄美でも出土例がない。この五朱銭を、大和―奄美大島を窓口にしたヤコウガイ交易で、どのようにして出土事例がきわめて少ない九州から多数入手しえたのか、そしてなぜ奄美諸島から最も遠い久米島に突出して出土することになるのかを説明する必要がある。

高梨説を前提にして琉球王国＝倭寇建国論を展開している吉成[2011:p.121]は、久米島の「ヤコウガイ大量出土遺跡」群が古墳時代並行期にほぼ終焉しているので「木下尚子や安里の議論は、根本的な点で成り立たない」という。また、「古墳時代並行期にほぼ終焉を迎えていたとすれば、安里進の立論の基盤が失われることになり、論争自体意味を持たない」とも述べている。

しかし、高梨が「ヤコウガイ大量出土遺跡」と認定した北原貝塚では、沖縄諸島で最多の13枚の開元通宝と1枚の五朱銭が出土している。新田[2003:p.229]は、「北原貝塚では、五朱銭に伴って開元通宝が13枚の他に広田上層タイプの貝符5点が検出されている」ことから「五朱銭の搬入も開元通宝が搬入された時期ではなかろうか」と述べている。この五朱銭は、「ヤコウガイ大量出土遺跡」とされている大原第二貝塚(10枚)を筆頭に北原貝塚(1枚)、清水貝塚(1枚・表面採集)でも出土している。久米島に突出して多く出土する開元通宝や五朱銭は、隋・唐とのヤコウガイ交易の産物として理解するのが妥当だと考える。

とはいえ、久米島―隋・唐交易にも問題点はある。琉球から中国に搬入したと考えられる大量のヤコウガイ殻が出土した事例が、中国の遺跡でまだ確認されていないことだ。この問題は、日本本土でもヤコウガイ匙の出土例がわずかしかないという点で、奄美―大和のヤコウガイ交易にもあてはまる。久米島の「ヤコウガイ大量出土遺跡」の評価については、まだ議論し解明すべき問題があることも確かである。

(5) 与那国島トゥグル浜遺跡と交易品としてのヤコウガイ貝肉

琉球列島最西端の与那国島は、中国大陸とは270 km、台湾とはわずか100 kmほどしか離れていない。この島の先島先史時代後期のトゥグル浜遺跡[沖縄県教委1985]⁽⁸⁾からは、1,529個のヤコウガイが出土しているが、1,434個(93.8%)が蓋で、殻(体層部)は95個(6.2%)という極めて特異

な出土状況だった。この状況について木下〔2000：p.204〕は、ヤコウガイの貝肉と貝殻がまるごと島外に搬出された可能性を示唆している。これまでのヤコウガイ交易では、交易対象として殻の利用だけが議論されてきたが、木下が示唆するように、貝肉も重要な交易品だった可能性がある。ヤコウガイの貝肉は、腐敗しやすいため考古資料としてとらえがたいが、近世琉球史料をみると、高級食材として扱われ、また、対中国交易における交易品のひとつだったことがわかる。

近世琉球では、久米島から毎年「歳暮捧物」として、首里城や王族家、高級役人などへ大量の「生屋久貝」と「漬屋久貝」を進上する慣わしだった⁽⁹⁾（『雍正十三年仲里間切公事帳』、『道光拾壹年久米仲里間切公事帳』、『久米具志川間切例帳』）。仲原善秀〔1990：pp.144・146〕によると、久米島では年末の歳暮捧物の進上にそなえて、平素から、ヤコウガイを採取次第、殻口部に穴をあけて縄でつないで海で飼っていたという。また、生屋久貝は殻付きのままのもので、漬屋久貝は中身を抜き取って塩漬や粕漬にしたもので、甲数としては粕漬・塩漬はるかに多かったという。

ヤコウガイは首里貴族の間で食用消費されただけでなく、中国から来琉した冊封使節団への料理に使われる高級食材で、また交易品でもあった。1864年の『元治元年支那冊封使来琉諸記』⁽¹⁰⁾には、冊封使節に生屋久貝144甲、干屋久貝1,378甲が食用として提供された記事がある。豊見山和行〔2000：p.156〕は、同治3年（1864）の『冠船に付き評価方日記』から、琉球産干屋久貝が毎年福州で交易されていたことを指摘している。

久米島から王家（首里城）に進上され消費されたあとの生屋久貝の殻は、首里城下の貝摺奉行所（漆器製作を所管）へ引き渡されて螺鈿用に使用されたと考えられる。貝摺奉行所

があった守礼門北側の御細工所跡や沖縄県立芸術大学周辺〔安里2001〕からは、大量のヤコウガイ殻が出土している。その中には殻口部に穿孔されたものも含まれており、久米島などから進上されたものであったことを裏付けている。御細工所跡の発掘調査〔那覇市教委1991〕で出土したヤコウガイは、殻457個・蓋1個で、「殻のみが出土」したといっても良い状況だった。これに対し首里城跡の発掘調査〔沖縄県教委1995・1998、沖縄県立埋文センター2001a・b・2003〕で出土したヤコウガイは、総計で、殻308個（15.9%）、蓋1,625個（84.0%）で、殻の約5倍の蓋が出土している。とくに「下之御庭」地区では蓋が殻の約50倍もあった。進上された殻蓋つきの生屋久貝が調理され食用に供されたあと、殻が御細工所などに持ち出された結果、蓋が城内に大量に残ったと考えられる。

以上に紹介した近世琉球のヤコウガイの貝肉利用と対中国交易、そして首里城跡の殻・蓋出土数量比をふまえると、与那国島トゥグル浜遺跡出土の大量のヤコウガイ蓋は、殻だけでなく貝肉も交易されたことを示唆している。そうであれば、与那国島の地理的位置を考えると、対中国交易しか考えられない。また、近世の事例ではあるが、ヤコウガイの干肉・漬肉が対中国交易品として存在したことは、従来のヤコウガイ交易における貝殻利用のみを念頭に置いた遺物分析と評価にたいして、貝肉利用という視点による再検討をうながすものである。



図5 沖縄県立芸術大学構内採集のヤコウガイ
螺鈿用に殻が割りとられている。
宮城篤正氏採集。

表2 首里城跡・御細工所跡出土のヤコウガイ

	殻			蓋			蓋殻 合計	蓋・殻の比率		出典	
	完形	殻頂	合計	完形	殻頂	合計		蓋÷殻			
首里城跡	南側城郭外	2	96	98	26	112	138	236	1.4	蓋1.4倍	沖縄県埋文2001a
	北殿跡	0	17	17	26	9	35	52	2.1	蓋2倍	沖縄県教委1995
	木曳門跡	0	58	58	41	123	164	222	2.8	蓋3倍	沖縄県埋文2001b
	奉神門跡	3	21	24	64	19	83	107	3.5	蓋3.5倍	沖縄県教委1998
	右掖門・周辺地区	2	143	145	410	160	570	715	3.9	蓋4倍	沖縄県埋文2003
	用物座跡	0	12	12	22	48	70	82	5.8	蓋5倍	沖縄県埋文2001b
	南殿跡	2	47	49	404	148	552	601	11.3	蓋11倍	沖縄県教委1995
	下之御庭	0	3	3	40	111	151	154	50.3	蓋50倍	沖縄県埋文2001b
合計	7	301	308	1,007	618	1,625	1,933	5.3	蓋5倍		
御細工所跡	1	456	457	1		1	458	0.002	殻のみ	那覇市教委1991	

③……………沖縄・奄美諸島の階層社会化論の検証

(1) 沖縄諸島の階層社会化論

ヤコウガイ交易で、7～8世紀の奄美・沖縄社会が、鈴木や山里が文献史料から想定したように階層社会化していたのかという問題について、考古学による検討が進められている。

木下 [2002] は、琉球の国家形成を9世紀頃から展開するヤコウガイ交易から論じている。大和におけるヤコウガイ需要の高まりが、博多商人の注意を琉球列島に向けさせ、その延長線上にカムイヤキ陶器窯の開業、畑作中心の農耕が展開し、社会の階層社会化が進んだというものだ。残念ながら、ヤコウガイ交易のどのような仕組みで階層社会化が進展していくのか、そして、その考古学的検証方法についての提示はなかった。

筆者 [2002b・2004a・2006c] は、木下による貝交易の研究成果をふまえながら、貝交易をとおして階層化していくプロセスをつぎのように想定した。サンゴ礁の礁湖に面して形成された遺跡群について、礁湖を共同利用する血縁的集団としての「漁撈共同体」としてとらえ、この漁撈共同体が貝交易をとおして組織的に統合されて首長を頂点にした「交易共同体」が成立し、交易用の貝の集取と交易品の再分配の過程で富の分配の偏りが生じて階層化していくという想定である。

具体的には、貝塚後期前半（弥生並行期）の沖縄諸島では、交易用にストックしたと考えられているゴホウラ・イモガイの集積遺構が、多くの集落遺跡から発見されていることから、漁撈共同体や集落単位で九州とゴホウラ・イモガイ交易がおこなわれていた段階を設定した。そして、伊江島の西ナガラ原貝塚のようなゴホウラやヤコウガイを大量に出土する遺跡の段階をへて、久米島に「ヤコウガイ大量出土遺跡」が登場する貝塚後期後半には、周辺の漁撈共同体や島々からヤコウガイを交易拠点に集積して加工処理し、中国や日本と交易してその交換物を漁撈共同体や集落へ再分配するというヤコウガイ交易段階へと発達していったのではないかと想定した。そして、ヤコウガイ加

工場が集落から分離してより専門化した遺跡として、久米島の「大原ヤコウガイ加工場跡」(仮称)をあげた。

この想定を検証する遺物として、交易共同体首長への富の集中を示す可能性がある「ブタ」骨をあげた。イノシシが生息していない伊江島や久米島の貝塚後期遺跡から「ブタ」骨が出土している。この「ブタ」骨をイノシシとみる意見もあるが、松井章 [1997・2005] は、その形質から飼育されたブタとみている。南川雅男 [2004] は、炭素同位体と窒素同位体の分析から、中国南部や長江流域の農耕民が飼育したブタが交易で運ばれてきたと報告している。貝塚後期社会の農耕生産力では、ブタの飼育は困難であっても交易品として入手することは可能である。「ブタ」骨は、鉄器とちがって貝塚後期遺跡が立地する珊瑚礁の砂丘遺跡では残存しやすく、また出土数量も多く定量分析に適している。「ブタ」骨の遺跡間あるいは遺跡内での出土状況の分析から、階層社会化の進展度を解明できる可能性がある」と提起した。

久米島をモデルにした筆者による沖縄諸島の階層社会化論は、文献研究による階層社会化論を考古学から検証するための方法論の提起である。

(2) 「大原ヤコウガイ加工場跡」の評価について

筆者のこの想定は高梨から批判を受けている。批判のひとつは中国—久米島というヤコウガイ交易はありえないというもので、もうひとつは久米島の「大原ヤコウガイ加工場跡」への批判である。前者については②-(4)で検討したので、ここでは「大原ヤコウガイ加工場跡」とその評価についてふれておきたい。

「大原ヤコウガイ加工場跡」(仮称)は、久米島のヤコウガイ交易において、周辺集落や島々からヤコウガイを集積・加工して交易する交易共同体の存在を示すものとして、筆者が紹介した遺跡である。複数の地点から構成された貝塚時代後期の大原第二貝塚の一部地点と考えられる。大原第二貝塚からは大量のヤコウガイと五朱銭10枚が出土していることは前に紹介した。この地点は、中心部分がリゾートホテルの建設で削り取られて失われたが、現在でも広い範囲に露出した地層断面のビーチロック下層の白砂層中に、ヤコウガイの貝殻未製品や殻の残欠が多数包含されている。土器などの生活遺物はほとんど採集できない。筆者が1972年に訪れたときは中心部分には大量のヤコウガイ殻が白砂層中に包含されていた。

筆者は、この場所がもっぱらヤコウガイを集積・加工した跡ととらえた。ゴホウラ・イモガイ交易段階では、沖縄諸島各地の集落内に交易用としてゴホウラやイモガイが集積されてストックされていたことと対比して、集落から分離したより専門的な加工場跡と推定したのである。そう推定したのは、沖縄諸島では、いわゆる「ヤコウガイ大量出土遺跡」の出現にいたるまでに、弥生～古墳時代平行期における集落単位のゴホウラ・イモガイ交易段階があり、その延長線上に「ヤコウガイ大量出土遺跡」が登場する。このゴホウラ・イモガイ貝交易の前史の有無が奄美大島のヤコウガイ交易と異なる点である。また、集落跡ではない白砂層中から広範囲にヤコウガイが多数出土する遺跡も奄美大島ではまだ確認されていないのではないだろうか。

高梨 [2005: p. 258] は、「大原ヤコウガイ加工場跡」についての筆者の認識について、発掘調査をおこなっていないにもかかわらず、年代や遺跡の性格がなぜ分かるのか、久米島町教育委員会など

が当該遺跡について記していないのはなぜか、などの疑義を投げている。この疑問については安里[2010: pp. 177~178]で答えたが、改めてこの問題を考えると、この遺跡に関する情報の一部については、筆者の記憶にもとづくものがあり客観情報として共有できないという問題がある。この点については高梨の指摘を受けいれなければならない。

ところで、筆者の回答が掲載された同書中で、高梨[2010: pp. 118~119]も、1985年頃にこの遺跡を地元の文化財保護審議会委員の案内で確認していたと述べているので、この遺跡の年代や性格についての高梨の判断とその根拠がいずれ示されると思う。その提示をみたくうえで、この遺跡の年代や性格についての私見も再検討してみたいと思う。この遺跡は、現在でもヤコウガイ未製品や殻のみを包含する白砂層が広い範囲に残存しているので、今後の発掘調査でこの遺跡の年代・性格を検証できる。その時までこの遺跡についての最終的な判断は保留しておきたい。

しかし、「大原ヤコウガイ加工場跡」の評価を保留したとしても、久米島に「ヤコウガイ大量出土遺跡」が3遺跡も存在し、しかも、ヤコウガイの出土数量においては奄美大島のいわゆる「ヤコウガイ大量出土遺跡」を凌駕している。そして、これらの遺跡から、奄美・沖縄諸島あるいは九州全域を含めて最も多くの五朱銭や開元通宝が出土している事実は変わらないので、前述したヤコウガイ交易システムをとおして階層化が進展するという想定や、これを「ブタ」骨から検証する方法論の提起はなお有効ではないかと考えている。

(3) 奄美大島階層社会論の検証

沖縄諸島の貝塚時代後期における階層社会をめぐるこのような研究状況に対し、7~8世紀の奄美大島では、ヤコウガイ交易による「階層社会の形成を積極的に支持する考古学的証左」を確認したというのが高梨である。ここでは、高梨の階層社会論が考古学の方法として成功しているか検証したい。

高梨[2009: pp. 102~107]は、7~8世紀の奄美大島に階層社会が認められるか否かについて、つぎのような考古学的分析を試みている。まず、外来土器(土師器・須恵器)の有無で、遺跡をつぎの3類型に分類する。兼久式土器は、貝塚時代後期の奄美諸島の在地土器である。

I類: 兼久式土器のみ出土

II類: 兼久式土器に若干量の土師器・須恵器が伴う

III類: 兼久式土器がほとんど出土せず土師器・須恵器が出土

そして、各遺跡の遺物出土状況をまとめた「奄美諸島における古代並行期の遺跡一覧」(以下「遺跡一覧表」)を提示し、この表を根拠にして「II類のほとんどの遺跡が、ヤコウガイ大量出土遺跡・鉄器出土遺跡である事実」を強調して、II類遺跡を「ヤコウガイ等の南方物産の集配作業に従事していた社会集団」(p. 105)とみる。

上記の「事実」を前提にして、つぎに階層社会形成の指標となる埋葬遺構・副葬品と鉄器から検討にはいる。埋葬遺構・副葬品からの検討は現段階では困難として見送っている。鉄器については、「各遺跡における鉄器出土数には著しい格差が認められる」としてこれを「鉄器所有形態に相違が認められる」と解釈する。そして「II類遺跡における交易活動により鉄器が入手され、さらにI類遺跡へ再分配されていく経路」を想定し、III類の「城久遺跡群では鍛冶関係の遺構・遺物も多数確認

されているので、鉄器のⅢ類遺跡→Ⅱ類遺跡→Ⅰ類遺跡の経路を考えてもいいのかもしれない。そうした社会集団における鉄器所有形態の相違こそ、階層社会の形成を積極的に支持する考古学的証左になる」と結論する。

高梨は、「遺跡一覧表」から、Ⅱ類の「ほとんどの遺跡」が、ヤコウガイ大量出土遺跡・鉄器出土遺跡である「事実」を引き出せると

いう。しかし、高梨の「遺跡一覧表」を整理すると（表3）、「ヤコウガイ大量出土遺跡」で鉄器出土遺跡に合致するⅡ類遺跡は、7遺跡中半分以下の3例しかないことがわかる。Ⅱ類だがヤコウガイ大量出土遺跡ではない事例が2例、鉄器が出土しない事例も3例ある。このようなデータから上記の「事実」を引き出すのは無理ではないかと考える。

また、Ⅱ類遺跡が、ヤコウガイ交易でⅢ類遺跡から鉄器を入手してⅠ類遺跡へ再分配したという説明にも矛盾がある。「ヤコウガイ大量出土遺跡」（6遺跡）のうち半数（3遺跡）では鉄器が出土していない。高梨の論理で解釈すると、ヤコウガイ交易を行っていても鉄器を入手＝所有できなかった遺跡が半数もあることになるからだ。

鉄器の出土数量差がなぜ所有差と解釈できるのか、また、鉄器が階層化を推進したとすることについての説明も必要だろう。農耕社会における鉄器は、農具化されることによって重要な生産手段となるから、鉄器の所有差は階層・階級差の指標になりうる。戦争が激化している社会でも、鉄器は兵器化されることで階層社会化・階級社会化を推進する役割を果たすだろう。しかし、漁撈を生産基盤とする7~8世紀の南島社会において、なぜ鉄器が階層化を押し進める道具になるのか、他の威信材と区別される本質的な差はどこにあるのか、説明がほしいところである。

ヤコウガイ交易で鉄器などが入手・再分配される過程で階層社会化していくという想定は、筆者が提起した久米島における交易共同体論と同じ論理だが、奄美における「階層社会の形成を積極的に支持する考古学的証左」とするためには、まだ方法論を洗練させ資料を蓄積していく必要がある。ヨーゼフ・クライナーが、城久遺跡群と石江遺跡群をめぐるシンポジウムをまとめた『古代末期・日本の境界』[ヨーゼフ・クライナーほか2010]の巻頭文で、ヤコウガイ交易や城久遺跡群をめぐる論評した「立場や見方の違いもあろうが、方法論を洗練させていくための始動期にあることを示している」という指摘を受け止めたいと思う。

階層社会化を分析する考古学的方法として参考になるのが、中島恒次郎[2010]による城久遺跡群第Ⅱ期の建物の分析方法である。中島は、城久遺跡群の掘立柱建物（一定の条件に合致し、平安

表3 奄美諸島における古代並行期の遺跡一覧[高梨2009表1を整理]

遺跡名称	出土土器	分類	鉄器出土 点数	ヤコウガイ 大量出土遺跡
喜界島	城久遺跡群	類 須 惠 器 土 師 器 須 惠 器	○	
	島中B遺跡	類 須 惠 器 土 師 器 須 惠 器	△	
	オン畑遺跡	類 須 惠 器 土 師 器 須 惠 器		
	巻畑B遺跡	類 須 惠 器 土 師 器 須 惠 器		
	巻畑C遺跡	類 須 惠 器 土 師 器 須 惠 器		
	先山遺跡	兼久式土器 土師器		
奄美大島	土盛マツノト遺跡	兼久式土器 土師器 須惠器	(87)	●
	小湊ワガネク遺跡群	兼久式土器 土師器	(22)	●
	和野長浜金久遺跡	兼久式土器 土師器 須惠器	(10)	●
	赤尾木手広遺跡	兼久式土器	○	
	用安良川遺跡	兼久式土器		●
	万屋泉川遺跡	兼久式土器 土師器 須惠器		●
	須野アヤマル第2貝塚	兼久式土器	(3)	
	喜瀬サウチ遺跡	兼久式土器	△	
	万屋下山田遺跡	兼久式土器	△	
徳之島	用見崎遺跡	兼久式土器		●
	面縄第一貝塚	兼久式土器	(1)	
	カムイヤキ古窯跡群	類 須 惠 器		

後期に属すると推定された建物) 143棟について、建物専有面積で階層B(15坪以上25坪未満)、階層C(10坪以上15坪未満)、階層D(5坪以上10坪未満)、階層E(5坪未満)に分類する。そして階層B(1棟)に対し階層C(5棟)、階層D(55棟)、階層E(92棟)という結果から大規模な建物と小規模な建物に二極化していることを指摘したうえで、城久遺跡群の建物構成を九州の他の遺跡の事例と比較している。中島は、二極化を慎重にも「階層差」とは表現しないが、こうした考古資料を定量化する作業の積み重ねの上に、「階層社会の形成を積極的に支持する考古学的証左」が得られてくるのではないかと問うている。

④……………グスク文化の形成と喜界島城久遺跡群

(1) ヤコウガイ交易と南島人の社会

筆者は、土肥との共著『沖縄人はどこから来たか』[安里・土肥1999]を出版した当時、琉球列島では、サンゴ礁の海で漁撈生活をおくる採集経済の原始社会が11~12世紀頃までつづいていたが、そこへ日本本土から渡来した人たちが、琉球列島の南島人を吸収しながら増大してグスク時代人となり、城塞的グスクや大型グスクを築いて琉球王国形成に向かうという図式をイメージしていた。

1990年代後半から、奄美大島や久米島にヤコウガイ殻が大量に出土する貝塚時代後期の遺跡が存在することが注目されはじめ、1990年代末から2000年代初頭には、木下[2000]や高梨[2000]のヤコウガイ交易論が登場した。奄美大島や久米島を中心に、南島人が7~8世紀から中国や日本と大規模なヤコウガイ交易を行っていたことが議論されるようになってきた。そして交易という経済活動で、地域によっては南島人の社会が首長を頂点にした階層社会に到達していたのではないかと、考古学でも考えられるようになってきた。

そうすると、グスク時代の開始にあたって、琉球列島の南島人は、渡来人に圧倒され吸収されていくだけの存在だったのかどうか再検討する必要がでてくる。先住民である南島人が、グスク時代人やグスク文化の形成、さらには琉球王権の形成にどの程度関わったのかという問題だ。これは、琉球列島のグスク文化の地域色やその後の琉球文化の多様性につながる新たな研究課題になっていくと考えている。琉球文化圏は、東京から福岡までの距離に匹敵する約800kmという広大な海域に分散する島々から構成されている。奄美・沖縄・宮古・八重山という地域と島々の文化は、シマクトゥバ(島々の言語)に象徴されるように多様性に富んでいる。この多様性は、グスク時代または琉球王国時代に形成されてきたのか、それとも貝塚時代後期文化や先島先史文化にさかのぼるのかという問題でもある。この問題を、グスク時代人の形質から考えてみたい。

(2) グスク時代・古琉球人骨の特徴

グスク時代をふくめた古琉球とよばれる時代(グスク時代~第二尚氏時代前期, 11世紀後半~17世紀初頭)の人骨出土事例は、この10年の間にだいぶ増加してきた。まず、琉球列島の先史時代から近世・近代にいたる人骨を長年にわたって調査・研究してきた土肥の研究成果を紹介したい。

土肥[2010: pp. 63-64]は、沖縄諸島の古琉球期の出土人骨を検討して、貝塚時代後期の南島人の

特徴を残しながらも、南島人にはみられなかった中世日本人の特徴が認められるという事実を多くの事例で確認している。沖縄諸島の南島人の特徴は、短頭性・低顔・低身長（平均 155～156 cm）だが、これに対する中世日本人の特徴として、長頭性・著しい歯槽性突顎（いわゆる出っ歯）傾向・高身長をあげている。

例えば、那覇市に所在するグスク時代のナカンダカリヤマ古墓 7 号墓 [沖縄県埋文センター2005] の風葬人骨の一部には、突顎傾向やかなり大柄の四肢骨が確認されている [土肥 2010 : p. 54]。首里城右掖門西方岩陰に風葬されたグスク時代の男性人骨 [沖縄県埋文センター2003] も、低顔で小柄だが突顎傾向が認められている [土肥 2010 : p. 55]。グスク時代には中世日本人の特徴を持つ者がいたことが明らかである。

15～16 世紀の銘苧古墓群の 4 号墓 [那覇市教委 1994・1998] からは、38 体の風葬人骨が出土している。短頭性・低顔・低身長という南島人の特徴を残しながら、長頭性・突顎という中世日本人の特徴も認められている [土肥 2003 : p. 584・2010 : p. 53]。男性の身長をみると、152.0 cm や 155.6 cm の低身長とともに、貝塚人にはみられなかった 168.7 cm という長身の者も現れている (pp. 63～64)。

同様な傾向は、先島諸島でも確認されている。グスク時代に先行する先島の先史人骨資料はわずかではあるが、先島先史時代末期～グスク時代初期（11～12 世紀）の大泊浜貝塚の女性人骨は、まだ沖縄諸島の南島人やフィリピン集団と共通する低顔・短頭性を特徴としていた [土肥ほか 2001]。

ところが 15～16 世紀の先島人には、宮古の住屋遺跡 [平良市教委 1999]・根間西里遺跡 [宮古島市教委 2006] や八重山の蔵元跡遺跡 [石垣市教委 1997]・石垣貝塚 [石垣市教委 1993a]・平川貝塚 [石垣市教委 1993b] などの人骨例にみられるように、低顔・短頭とともに突顎・長頭傾向・高身長という沖縄諸島のグスク時代人や中世日本人と共通する特徴が認められるのである [土肥 2010 : pp. 59～60]。土肥 [2003 : pp. 601～602・2010 : pp. 64～65] は、先島人の形質もグスク時代以降には、沖縄や中世日本人に近くなっていくが、その変化は沖縄諸島よりもおくれで進行したとみている。古琉球という時代は、先史時代には異なる文化圏だった奄美・沖縄諸島と先島諸島が、ひとつの琉球文化圏としてまとまるだけでなく、琉球＝沖縄人集団としてもひとつになっていった時代ではないかとも考えている。

初期の琉球王陵である浦添ようどれ [浦添市教委 2005] の 2 号石厨子（15 世紀）の成年男性も、中頭に近い短頭で低顔だが、丸い眼窩と著しい突顎という典型的な中世日本人の特徴があった。一方、4 号石厨子（13～15 世紀前期）からは、中国南部や東南アジアに多くて琉球・日本・朝鮮では少ないタイプのミトコンドリア DNA が検出された。土肥 [2010 : p. 58] は、琉球王国の成立に、日本、中国、東南アジアなど周辺諸国の関与を示唆していると考えている。

土肥 [2010 : pp. 61～63] はこのほかに、琉球列島の風葬が、古琉球において首里を中心に受容された可能性や、火葬が王族や首里周辺の人たちに受容されていた可能性も指摘している。

(3) 沖縄・先島諸島におけるグスク文化の受容状況

筆者は、土肥との対談 [安里・土肥 1999] で、「グスク時代と貝塚時代との間には文化的・経済的な深い断絶がある」(p. 65) として、貝塚時代からグスク時代への文化転換を強調しながらも、貝塚時代とグスク時代の連続性についても指摘した。たとえば、熱田貝塚のように、集落そのものが貝

塚時代からグスク時代までそのまま継続していく事例も多くみられることや、ヤコウガイ製貝匙の製作がグスク文化にも引き継がれること、宮古島の住屋遺跡ではグスク時代の層からシャコガイ製貝斧が出土した事例、先島諸島の外耳土器と沖縄諸島のグスク土器のようにグスク文化の出現当初からローカル性をもっていることなどから、貝塚文化や先島先史文化が、一部ではあるがグスク文化に受け継がれていることを指摘した (pp. 93~94)。

熱田貝塚の発掘調査事例 [金武 1982] は、海岸砂丘という貝塚時代の典型的な居住地で、貝塚時代後期土器 (くびれ平底土器) を使う生活から、縦耳付き石鍋やカムイヤキ、南宋白磁などを交易で手に入れながら、縦耳付き石鍋を模倣したグスク土器を使い始めるグスク時代的な生活に移行していく状況が典型的に把握された事例だといえる。類似の発掘調査事例には勝連町の平敷屋トゥバル遺跡がある。

このように海岸砂丘地でグスク時代を迎えた貝塚時代人の集落もあったが、勝連グスク下層、フェンサグスク下層、具志川グスク下層 (うるま市) などの遺跡のように、すでに貝塚時代後期から防御的な石灰岩丘陵頂部に居住し、そのままグスク時代に移行し、さらには勝連グスクのように大型グスクにまで発達していった事例もある。

先島でも、先史文化の生活からグスク文化へ転換していく様子が、琉球列島最南端・波照間島の先島先史時代終末期とされてきた大泊浜貝塚の発掘調査で具体的に把握されている [安里 2002a]。安里と土肥は、1997年11月の大泊浜貝塚の発掘調査で、11~12世紀頃に埋葬された女性1体と新生児1体を発掘した [安里・春成編 2001]。調査結果を要約するとつぎのようになる。

大泊浜貝塚ではこの時期まで、漁撈と西表島でのイノシシ猟が主な生業で、土器を使用せずに石蒸し調理をおこなう無土器文化の生活をおくっていた。グスク文化の波は、琉球列島最南端の島にも確実に押し寄せていた。沖縄県教育委員会 [1986] の発掘調査と筆者らの発掘調査では、交易で手に入れた滑石製石鍋、南宋の白磁や褐釉陶器、カムイヤキと鉄製の鑿が出土している。褐釉陶器は、沖縄諸島での出土数は少ないが、大泊浜貝塚では表面採集でも多数得られていて、鉄製鑿とともに南中国との直接交易で入手したものと思われる。先島先史時代後期の遺跡からは、鉄製鑿と開元通宝がしばしば出土するが、いずれも中国からもたらされたと考えられる遺物である。新しい時代の波は、城久遺跡群を発信源とする北からのグスク文化の波だけでなく南中国からも押し寄せて

いたことを示している。また、殻の一部が割りとられたヤコウガイが3個、ヤコウガイ製貝匙が2点出土しており、大泊浜貝塚の交易品のひとつがヤコウガイだったことを示している。

埋葬された女性は、土肥の所見によると20代前半である。伏臥屈葬され、腰の側には新生児の骨が置かれていた。女性の頭骨は低顔・短頭である。各時代の日本人集団と南西諸島集団、台湾平埔族、フィリピン集団などとの比較分析では、波照間島の毛

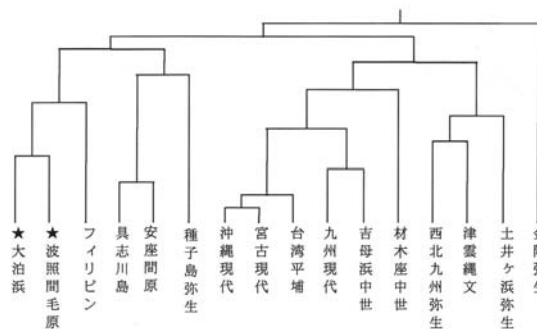


図6 頭骨計測9項目のマハラノビス距離による樹状図
[土肥ほか2001より]

原遺跡の人骨や、フィリピン集団、沖縄諸島の南島人などに近いという結果が得られている（図6）。土肥は、女性の形質にはフィリピンや南島人と共通する特徴が残存していた可能性がある指摘している。

女性人骨の頭には、八重山製とみられる外耳土器（土鍋）の破片が被せられ、頭や腰のあたりにはシャコガイが置かれていた。この土器は、これまでの大泊浜貝塚の発掘調査で出土した唯一の土器で、周辺の島との交易で手に入れたと思われる。先島先史文化は無土器文化だったので、土器を頭骨にかぶせる埋葬風習はグスク文化の一つとして伝わったと考えられる。頭骨に土器を被せる埋葬風習は沖縄の貝塚時代後期にもあり、喜界島にも遺体に鍋をかぶせて埋葬する風習があったという [増田1974: p.116]。遺体にシャコガイを添える埋葬風習も、沖縄の貝塚時代後期文化からグスク文化に引き継がれた風習である。

この時期（11～12世紀）には、宮古・八重山の多くの島々がグスク文化に転換していたと考えられる。琉球列島最南端の波照間島の埋葬女性は、まさにグスク文化を受け入れつつある最後の先島先史人だったのである。さきに紹介したグスク時代への移行期の沖縄諸島の遺跡事例からすると、大泊浜貝塚の先島先史人も、新しいグスク文化を受け入れながら、あるいは混血しながらグスク時代人へと次第に変化していったと思われる。

(4) グスク時代の農耕技術と人口増大

琉球列島のグスク時代を開始させた日本側の基地を喜界島と奄美大島北部地域に特定したのが高梨である。高梨は、「喜界島・奄美大島勢力圏」を設定して、この集団が琉球列島に南漸してグスク時代を開始させ、琉球王権を成立させたとの見通しを立てている。そして、日本勢力の南漸を交易との関連でとらえている。少なくとも農耕との関連での言及はない。筆者は、グスク時代を交易の展開でとらえることはいうまでもなく重要だが、グスク時代社会が島々の農耕集落から構成されていることも重視する必要があると考えている。グスク時代の農耕集落と農耕技術という視点から、城久遺跡群について検討したい。

グスク時代の農耕技術とその特質について筆者は、1980～90年代に分析してきた成果を、1990b・1998年論文に総括し、1993論文でも中鉢良護 [1992] の批判に答えて詳論した。また、最近では、これまでの筆者のグスク時代農耕技術を低技術＝低生産力でおくれていると位置づけてきたことについて、視点を改め、琉球列島の風土に適応した複合経営と集約農耕として再評価した [安里2006a]。これらの拙論をふまえてグスク時代の農耕の特徴を整理するとつぎのようになる。

農耕は、グスク時代の生産基盤であった。グスク時代の開始とともに、琉球列島では、集落のほとんどが琉球石灰岩台地上に立地するようになり、遺跡からは炭化したムギ・アワ・イネなどが普遍的に出土し、農耕具が確認され、畑跡や倉庫跡も発掘されている。琉球列島の伝統的な農耕では、この台地上でムギ・アワ畑作が行われ、台地縁辺の谷底低地や海岸低地で水稻作がおこなわれてきたので、グスク時代の農耕も石灰岩台地上でのムギ・アワ畑作が主体だったと考えられる。また牛骨も多数出土しているので、〈ムギ・アワ畑作＋水稻作＋牛飼育〉という複合経営だったといえる。

15世紀の史料によると、農耕具には鉄製スキ・クワがなく、ムギ・アワ作などは鉄製ヘラで小ピットを掘って播種と施肥をおこなっていた。水田は一期作と二期作があり、牛に踏耕させた。収

穫には穂摘みもおこなわれていた。グスク時代の出土遺物でも15世紀の史料に対応して、鉄製幅広ヘラ⁽¹¹⁾、穂摘み用の鉄製小型鎌があるが、鉄製スキ・クワの出土例はない。集落や屋敷の周辺から、小ピット列が何列も整然と並んだ畑跡（小ピット列群）が発掘されている。穂摘み鎌や堀棒耕作のような小ピット畑作から低い農耕技術がイメージされてきたが、これは、集落や屋敷の近くで日常的に管理する園芸的な畑作で、また、小ピットに集中的に施肥をおこなう集約農耕だと考えるべきだろう。

栽培の作季は、琉球列島の伝統的な冬作システムだったと考えられる。1719年に尚敬王の冊封使節として来琉した徐葆光は、琉球の農業システムを「秋耕冬種春耘夏収」と述べている。秋に耕し冬に播種し春に雑草をとって夏に収穫するという意味だ。夏季は台風や干ばつに見舞われるので、温暖で雨量も安定している冬季を中心に栽培するのだという。琉球列島の気候・風土に適応した独特な栽培システムだ。しかも、ムギ畑作と水稻作、ムギとアワ作はうまく播種・収穫の農繁期が重ならないようになっている。このような栽培システムが、近世琉球では、奄美諸島から八重山諸島まで普遍的に行われ、史料から15世紀までさかのぼって確認できるので（図7）、グスク時代以来の伝統的な栽培システムだったと考えられる。

旧暦 栽培作物	月										栽培作物複合と栽培地域					
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	石灰岩台地 縁辺地帯	石灰岩台地 地帯
水稻再生作	▲	...	★	●	●	...	◎	▲	...	水稻再生作 + 麦作		
麦作	▲	●	▲	▲	...				
粟二期作	▲	▲	●	...	▲	...	●	▲	麦作+粟作		
水稻二期作	...	●	▲	★	...	●	▲	★	...	●	...			

図7 15世紀沖縄諸島の栽培システム[安里1991bより]
▲播種 ★田植 ●収穫 ◎再生穂の収穫。

以上に述べたグスク時代の農耕の特徴を列挙すると、鉄製スキ・クワの欠如（ないしは未発達）、鉄製ヘラ、牛踏耕、穂摘鎌、石灰岩台地でのムギ・アワ作主体、畑作・水稻・牛の飼育による複合経営、集約農耕、冬作システムなどである。このような農耕は、日本本土のような、鉄製スキ・クワで耕地開発を押し進めて生産量を増大させるシステムに比べると生産力は低い、台風・旱魃による壊滅的な危険を回避して生産力を安定させることができる。琉球列島の農耕は、生産量の増大に向かわずに、琉球列島の風土に適応した安定的な農耕生産を目指していたと考えられる。

グスク時代には、この安定的なムギ・アワ畑作中心の農耕に支えられて、沖縄島中・南部の石灰岩台地や琉球石灰岩の島々を中心に集落が激増（図8）、人口が急激に増大していった[安里1990b・⁽¹²⁾2011b]。

(5) 喜界島における冬作システムの麦作

近世喜界島の農耕も、琉球石灰岩の沖縄諸島の島々と同様なシステムだった。小林茂[2003:p.162・

p.181]によると、奄美諸島では、琉球石灰岩台地でのムギ・アワ畑作を主体にした集約的土地利用密度が高かった。喜界島・沖永良部島・与論島など、琉球石灰岩の島の土地利用密度が高く、そのなかでも最も高いのが喜界島だった。また、近世奄美の人口密度は、石灰岩台地が発達した喜界島が最も高く、同じく石灰岩台地の与論島と沖永良部島がこれにつづいたが、人口密度の高さは、石灰岩台地の高い集約的土地利用密度とむすびついていたと指摘している。

近世の奄美諸島では冬作システムの農耕が行われていたが、17世紀末の喜界島でも、麦作が主体で奄美・沖縄諸島と同じ冬作システムだったことが、元禄6年(1693)に薩摩藩から喜界島代官に通達された「覚」から確認できる。

「覚」には、「一鬼界島之儀、麦作第一二仕、余島ニ相替、田方四五月植付、八月致取納由候、適植付候地方も、麦作刈仕廻、俄田地相拵候故、下地匱相有之⁽¹³⁾」とある。喜界島は麦作が重要で余島

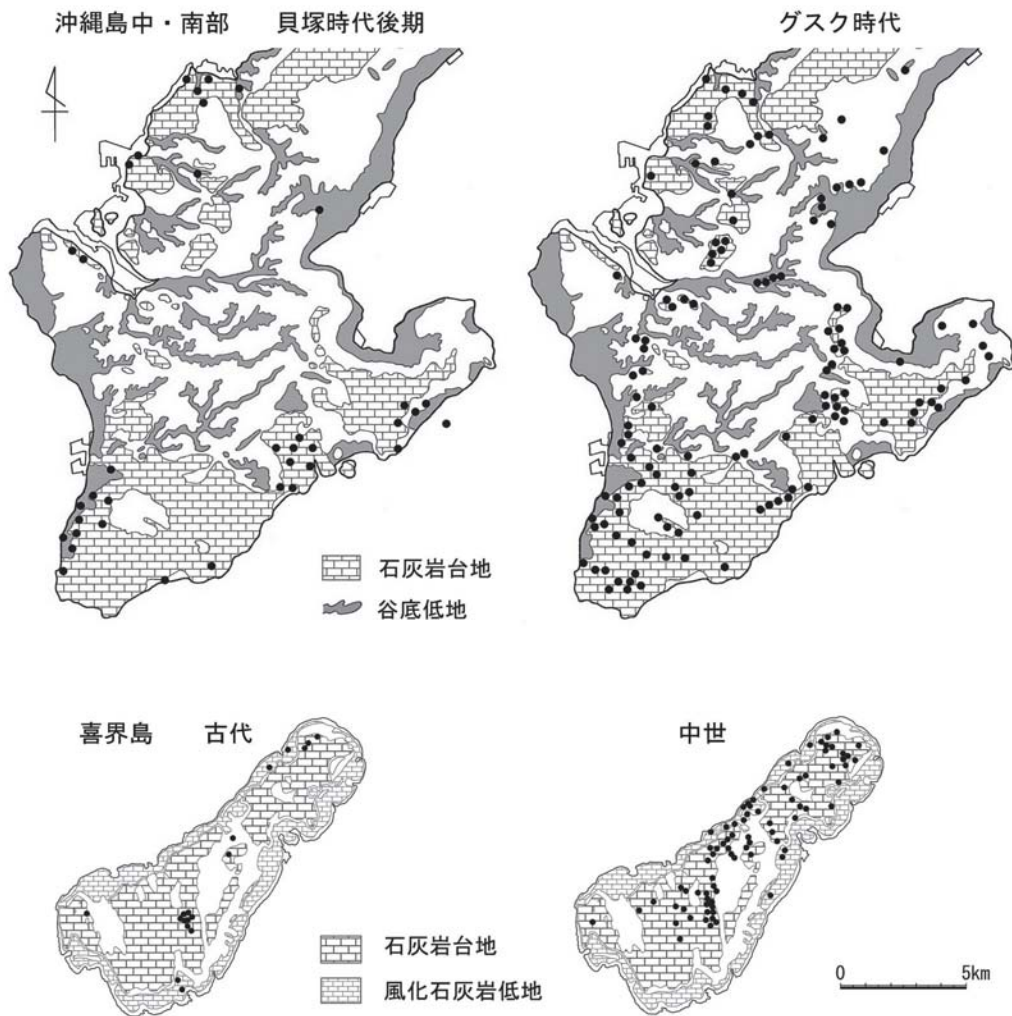


図8 沖縄島中・南部と喜界島における琉球石灰岩台地と遺跡分布の変化

地形分類は、沖縄島については沖縄県 [1977]から作製。喜界島は、国土交通省の5万分の1都道府県土地分類基本調査による「地形分類図」(<http://tochi.mlit.go.jp/tockok/know/know.html>)から作製。沖縄島の遺跡分布は安里[1990b]による。喜界島の遺跡分布は、池畑耕一[2007]による。

(奄美大島など稲作主体の島)と異なり、稲は(旧暦)4・5月に植え付け、8月に収穫している。稲を植え付けているところでも麦刈り後に急に水田の地拵をするので不十分になっているという。喜界島の伝統的な麦作は沖縄とおなじ9月播種だったが[増田1974:p.122]、17世紀末でも麦は旧暦9月播種—4月収穫され、稲はその間の4・5月植付—8月収穫という作季だったことがわかる。

近世喜界島では、冬作システムの麦畑作が中心で、土地利用密度と人口密度が奄美諸島で最も高かったことを紹介した。城久遺跡群の出土遺物や遺構から裏付けたわけではないが、喜界島のこの特徴は、沖縄諸島の島々と同様にグスク時代(中世)にさかのぼると思われる。また、池畑[2007]は、喜界島の遺跡分布について「古代までせいぜい十数か所しかなかった遺跡数が急増するのが中世である」(p.59)と指摘している。池畑はカムイヤキ陶器窯出現(11世紀後半)以後を「中世」としている。池畑の遺跡分布を、喜界島の地形分類図に載せたのが図8である。中世喜界島でもグスク時代の沖縄島中南部のように、琉球石灰岩台地を中心に展開した遺跡数の激増=人口増大という現象が起こっていたと考えられる。喜界島の城久遺跡群が琉球列島のグスク文化の発信源とすると、グスク時代の農耕技術はまずは喜界島で成立したと考えられる。

(6)「グスク文化の原型」の成立——仮説の提起

以上の議論をふまえて、喜界島で城久遺跡群を中心に「グスク文化の原型」が形成され、琉球列島へ波及していったのではないかと仮説を述べることにしたい。考古学的根拠も十分でなく、実証にはほど遠い見通しではあるが、グスク文化の成立を多様な視点から分析・追求していくための一つの手がかりとして提起したい。

喜界島におけるグスク時代的な農耕技術の成立は、城久遺跡群の第Ⅰ期にさかのぼると考えられる。琉球列島の風土に適応した冬作システム麦作が定着するためには、風土に順応した麦品種の選抜や、栽培の試行錯誤が必要だと考えられる。九州系集団を中心にした城久遺跡群が突如として島に登場し、南島との交易をおこなう9~11世紀のおよそ200年前後が、渡来者が持ち込んだ九州系麦畑作を琉球的な冬作システムの麦作に転換させていった期間ではないかという想定である。

新里貴之[2010]は、城久遺跡群の第Ⅰ期には、炊飯具の土師器甕に南島の要素があることから在地集団の存在を示唆しているが、彼らが渡来者の生活をサポートしていたと考えれば、当然ながらその食料供給のために農耕がおこなわれ、喜界島の風土にあった冬作システムの麦作が成立していったと考えることは可能だと思う。

そして、城久遺跡群Ⅰ期の200年前後の間に、喜界島島民と九州系集団との間で混血が進み、土肥が指摘しているような南島人の形質を残しながらも中世日本人の特徴をあわせもったグスク時代人の祖型が形成されていったと思われる。そして、城久遺跡群第Ⅱ期に、遺物構成における琉球化だけでなく、農耕技術、交易システム、ヒトの形質、さらには階層社会関係などを含めた広い意味での「グスク文化の原型」が成立したのではないかと考えたい。

一方、Ⅰ期~Ⅱ期におけるグスク時代的な冬作システム麦作の成立によって、グスク時代に琉球列島の石灰岩の島々で展開した遺跡の激増=人口増大という現象がまずは喜界島で発生し、これが人口圧となっていたのではないかとと思われる。そして、11世紀における城久遺跡群の転換を契機に、農耕民と支配層の移住が、琉球列島の石灰岩の島々を中心に始まっていったのではないかと推定で

きる。

こうした「グスク文化の原型」を背負った城久遺跡群からの移住者たちが、琉球列島の島々で南島人と混血しながら文化的にも融合していくことで、琉球列島のグスク時代人やグスク文化の地域性（多様性）が成立したのではないかと想定したい。

むすび

本稿では、7～12世紀の琉球列島をめぐる研究状況を整理したうえで、いわゆる「ヤコウガイ大量出土遺跡」をめぐる問題と沖縄・奄美諸島階層社会化論について、議論をかわしている高梨と筆者の論考を中心にその共通点と相違点を検討し、「グスク文化の原型」の形成と城久遺跡群をめぐる筆者の仮説を提起した。

高梨が提唱する「ヤコウガイ大量出土遺跡」の概念については、「大量出土」についての数量的規定がないために、奄美大島の「ヤコウガイ大量出土遺跡」の意義を強調するが、久米島の「ヤコウガイ大量出土遺跡」や、沖縄諸島や与那国島のヤコウガイが大量に出土する遺跡の存在については全く評価しないという理解が生じていると指摘した。

筆者の沖縄諸島の階層社会化論については、その論拠のひとつである久米島の「大原ヤコウガイ加工場跡」（仮称）の評価を、将来の発掘調査で遺跡の性格が確認されるまで保留しておきたいが、貝交易のシステムをとおして階層化していく想定や、「ブタ」骨による検証の方法論は有効だと考えた。高梨の奄美諸島の階層社会化論については、高梨が根拠として掲げた資料を検証したが、この資料から「階層社会の形成を積極的に支持する考古学的証左」とする「事実」を引き出すのは無理ではないかと判断した。

筆者も高梨や木下と同様に、ヤコウガイ交易による南島社会の階層化を想定してきた者ではあるが、自戒をこめていうと、文献研究による成果を前提に考古資料を解釈するのではなく、考古資料から文献研究の成果を検証する姿勢が必要だったとの反省がある。考古学で南島社会の階層化を検証し実証するためには、現状は、方法論を洗練し資料を蓄積していく段階ではないかと考えている。そのためには、多様な視点によるアプローチと試行錯誤という柔軟な研究姿勢が必要だろう。

「グスク文化の原型」の形成と城久遺跡群については、次の仮説を提起した。まず喜界島で城久遺跡群Ⅰ期の200年前後の間に日本の影響下で、グスク時代的な遺物構成、農耕技術、交易システム、ヒトの形質、階層社会などを含めた広い意味での「グスク文化の原型」が形成された。そしてグスク時代的農耕の展開に伴って増大した人口圧力によって、Ⅱ期（11～13世紀）への転換を契機に、喜界島から琉球列島への農耕民や支配層を含めた集団移住が始まることで琉球列島のグスク時代が幕開けしたという仮説である。

ところで、筆者は2000年初頭頃まで、グスク時代に増大した農耕集落とその地域共同体を基礎に沖縄各地に地域領主の大型グスクが登場し、これらが海外交易の拡大をめぐる政治的経済的に統合されて琉球王国が成立していくとの見通しに立って論考をまとめてきた[安里1990a・1991b・1998など]。ところがその後、初期琉球王陵・浦添ようどれの発掘調査の実施や、木下や高梨のヤコウガイ交易論に接して、琉球王国成立の前提となる琉球王権の形成は、貝塚時代後期社会との連続性や、

東アジア世界との関係を契機にして出現するのではないかという方向に研究を転換してきた（拙論の経過については大平聡 [2010] を参照されたい）。本稿も、その作業の一環であるが、そうすると、これまで筆者が提起してきた地域共同体論や大型グスク論、王一寨官体制論などとの整合性が問われてくる。この課題については別稿で論じたいと考えている。

なお、本稿は安里 [2010・2011ab] をベースにしたもので、2011年、2012年の研究成果を十分に反映させることができなかつたことを断っておきたい。

註

(1)——鈴木靖民 [2008] は、安里が『交易共同体』の首長を頂点とする交易システムの成立を考え、グスクの遺跡と富の象徴として入手したブタの飼育をその傍証として揚げた」(p. 36) と紹介しているが、筆者の提起しているのは「ブタの飼育」ではない。同書で、貝塚時代後期の社会では「ブタ」の飼育が困難であっても交易によって入手することは可能である」と述べたように、交易で入手した富の象徴としてのブタの消費であり、その結果残される「ブタ」骨が階層社会化を分析する材料になる可能性があるという方法論の提起である [2006c: p. 418]

(2)——ただし、この「二つの口」論にはつぎの含みがある。久米島を隋唐とのヤコウガイ交易の窓口と考えるが、奄美大島北部にも高梨が主張するように、7・8世紀から大和との交易窓口だった可能性もあると今のところは考えておきたい。

(3)——安里 [1989] は新聞紙上に掲載したもので、その後安里 [1991] に一部訂正して収録した。

(4)——最近では、グスク時代開始期に奄美から琉球列島への集団移住があったと論じる研究者は多いが、その形質人類学的根拠が土肥の研究業績であることが十分に評価されてないように思う。

(5)——高梨は、鳥袋も「ヤコウガイ大量出土遺跡」が奄美大島に偏在すると認識していると紹介しているが、鳥袋 [2004: p. 238] では、「ヤコウガイ大量出土遺跡」として奄美に4遺跡、久米島に3遺跡をあげている。また、「奄美大島に偏在している」というようなことはどこにも書いていない。この数値から鳥袋が高梨と同様に「奄美諸島を中心に偏向した分布が認められる」と「事実認識」しているとは思えない。

(6)——池田榮史 [2006] も、「ヤコウガイ大量出土遺跡は沖縄諸島久米島をはじめとして琉球列島全域に出現するとする安里進の所論（安里 1996・2004 [本稿の2004b: 安里注]）が発表された」（p. 124）と拙論を紹

介したうえで批判している。しかし、池田の紹介には二重の誤読がある。池田が掲げた拙論では「ヤコウガイ大量出土遺跡」については一言もふれていない。他の拙論でも「ヤコウガイ大量出土遺跡」が「琉球列島全域に出現する」と主張したこともない。拙論を確認せずに高梨の批判をそのまま踏襲したと思われる。

(7)——高梨はその後、奄美大島の「ヤコウガイ大量出土遺跡」として用安良川遺跡を加えている [高梨 2007]。ここでは、2006年頃までの争点を整理するために、奄美5遺跡をとりあげた。

(8)——トウグル浜遺跡の所属時期については発掘調査報告書 [沖縄県教委 1985] にもとづく。

(9)——久米島から首里へ進上されたヤコウガイは、租税として貢納されたと説明されることが多いが、租税ではなく強制的な「御捧物」である。その起源は不明だが、『羽地仕置』（1666～73）に、久米島・慶良間・粟国・伊平屋島からのヤコウガイの歳暮を禁止した記事がある。また、『歴代宝案』によると1372～1692年まで途中2度の中絶があるが、大量のヤコウガイが中国へ朝貢された。久米島はじめこれらの島々がヤコウガイの供給島だったと考えられる。

(10)——浦添市立図書館蔵の『ハワイ沖縄資料』マイクロコピー本。

(11)——鉄製幅広ヘラの出土例には、勝連グスク [勝連町教委 1990] と稲福遺跡 [沖縄県教委 1983] から各1例出土している。勝連グスク例は「銚状鉄製品」、稲福遺跡例は「鉄斧」として報告されているが、同一の形状で鉄製幅広ヘラと考えられるものである。

(12)——グスク時代に人口増大があったことは多くの研究者が指摘しているが、具体的に貝塚時代後期とグスク時代の遺跡数と立地状況を提示したのは拙論 [安里 1991b] しかない。古いデータではあるが本稿で使用する理由である。図8の遺跡名については安里 [1998] を参照。

(13)——「覚」は小林 [1974: p. 12] から引用した。

引用文献

- 赤司善彦 2007 「高麗時代の陶磁器と九州および南島」『東アジアの古代文化』130号, 特集古代・中世の日本と奄美・沖縄諸島, 古代学研究所編, 大和書房, 118～131頁。
- 安里嗣淳 2003 「総説」『沖縄県史 各論編 第二巻 考古』財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室, 1～58頁。
- 安里 進 1987 「琉球—沖縄の考古学的時代区分をめぐる諸問題 (上)」『考古学研究』第34巻第3号, 考古学研究会, 65～84頁。
- 安里 進 1989 「グスク時代開始期の再検討⑥」『琉球新報』10月13～31日付け朝刊, 琉球新報社。
- 安里 進 1990a 「熱田貝塚の石鍋 A 群と A 群系土器の年代」『地域と文化 沖縄をみなおすために』第57号, 地域と文化編集委員会編, ひるぎ社, 2～9頁。
- 安里 進 1990b 『考古学からみた琉球史 上』ひるぎ社。
- 安里 進 1991a 「グスク時代開始期の再検討」『新琉球史—古琉球編—』琉球新報社, 65～90頁。
- 安里 進 1991b 「グスク時代」『新版古代の日本3』下条信行・平野博之・知念勇・高良倉吉編, 角川書店, 520～530頁。
- 安里 進 1993 「古琉球の水稲品種—中鉢良護氏の批判について—」『地域と文化 沖縄をみなおすために』第77・78合併号, 地域と文化編集委員会編, ひるぎ社, 2～19頁。
- 安里 進 1996 「大型グスク出現前夜—石鍋流通期の琉球列島」『新しい琉球史像—安良城盛昭先生追悼論集—』榕樹社, 7～26頁。
- 安里 進 1998 『グスク・共同体・村』榕樹書林。
- 安里 進 2001 「琉球王国貝摺奉行所の漆器製作システム—王府内分業と民間請負—」『漆工史』第24号, 漆工史学会, 21～46頁。
- 安里 進 2002a 「起源論争の島」『東北学』Vol. 6, 東北芸術工科大学東北文化センター, 158～166頁。
- 安里 進 2002b 「琉球文化圏と琉球王国の形成」『いくつもの日本 I 日本を問いなおす』赤坂憲雄・中村生雄・原田信雄・三浦祐介編, 岩波書店, 155～178頁。
- 安里 進 2003 「琉球王国の形成と東アジア」『琉球・沖縄史の世界』日本の時代史18, 吉川弘文館, 84～115頁。
- 安里 進 2004a 「琉球王国形成の新展望」『中世の系譜 東と西, 北と南の世界』考古学と中世史研究1, 高志書院, 215～242頁。
- 安里 進 2004b 「大型グスクの時代」『沖縄県の歴史』県史47, 山川出版社, 40～57頁。
- 安里 進 2006a 「琉球・沖縄史をはかるモノサシ—陸の農業と海の交易」『地域の自立 シマの力 (下) 沖縄から何を見るか 沖縄に何を見るか』新崎盛輝・比嘉政夫・家中茂編, コモンズ, 156～172頁。
- 安里 進 2006b 『琉球の王権とグスク』日本史リブレット42, 山川出版社。
- 安里 進 2006c 「考古学からみた7—10世紀の琉球列島」『列島の文化史 ひと・もの・こと1』岩波書店, 408～423頁。
- 安里 進 2008 『琉球の王権とグスク』日本史リブレット42, 1版2刷, 山川出版社。
- 安里 進 2010 「ヤコウガイ交易二つの口と一つの口—争点の整理と検討—」『古代末期・日本の境界 城久遺跡群と石江遺跡群』森話社, 161～180頁。
- 安里 進 2011a 「古代・中世の日琉境界史—奄美大島階層社会論の検証—」『歴史と地理 日本史の研究』第647号, 山川出版社, 1～18頁。
- 安里 進 2011b 「グスク時代人の成立をめぐる考古学研究」『沖縄人はどこから来たか—琉球・沖縄人の起源と成立— (改訂版)』ポーターインク社, 140～157頁。
- 安里進・土肥直美 1999 『沖縄人はどこから来たか—琉球・沖縄人の起源と成立—』ポーターインク社。
- 安里進・土肥直美 2011 『沖縄人はどこから来たか (改訂版) —琉球・沖縄人の起源と成立—』ポーターインク社。
- 安里進・春成秀爾編 2001 『沖縄県大泊浜貝塚』考古資料集27, 国立歴史民俗博物館春成研究室。
- 安里進・山里純一 2006 「古代史の舞台 琉球」『列島の文化史 ひと・もの・こと1』岩波書店, 391～426頁。
- 池田榮史 2005 「兼久式土器に伴出する外来系土器の系譜と年代」『小湊フワガネク遺跡群 I』名瀬市教育委員会, 134～148頁。
- 池畑耕一 1998 「考古資料から見た古代の奄美諸島と南九州」『列島の考古学—渡辺誠先生還暦記念論集』渡辺誠先生古稀記念論集刊行会。
- 池畑耕一 2007 「考古学からみた喜界島」『古代・中世の境界領域—キカイガシマの位置づけをめぐる—』資料集, 文部科学省科学研究費特定領域研究「中世考古学の総合的研究」(領域代表前川要中央大学教授) C01-4 [中世東アジアの交流・交易システムに関する新研究戦略の開発・検討] 班 (研究代表者池田

- 榮史琉球大学教授), 57~60頁。
- 石垣市教育委員会 1993a 『石垣貝塚 県道真栄里新川線街路改修工事に伴う緊急発掘調査報告書』。
- 石垣市教育委員会 1993b 『川平貝塚 県道真栄里新川線街路改修工事に伴う緊急発掘調査報告書』。
- 石垣市教育委員会 1997 『蔵元跡発掘調査報告書』。
- 浦添市教育委員会 2005 『浦添ようどれの石厨子と遺骨—調査の中間報告—』。
- 大平 聡 2010 「グスク研究覚え書き——安里進氏の『グスク時代論』を中心に」 『沖縄研究 仙台から発信する沖縄学』
宮城学院大学国際キリスト教研究所, 9~38頁。
- 沖縄県教育委員会 1983 『稲福遺跡発掘調査報告書(上御願地区)』。
- 沖縄県教育委員会 1985 『与那国島トゥグル浜遺跡』。
- 沖縄県教育委員会 1995 『首里城跡—南殿・北殿跡発掘調査報告書—』。
- 沖縄県教育委員会 1986 『下田原貝塚・大泊浜貝塚—第1・2・3次発掘調査報告—』。
- 沖縄県教育委員会 1998 『首里城跡—御庭跡・奉神門跡発掘調査報告書—』。
- 沖縄県農業試験場 1977 『地力保全基本調査成績書(南部・中部地域)』。
- 沖縄県立埋蔵文化財センター2001a 『首里城跡—管理用道路地区発掘調査報告書—』。
- 沖縄県立埋蔵文化財センター2001b 『首里城跡—下之御庭・用物座・瑞泉門・漏刻門・廣福門・木曳門跡発掘調査報告書—』。
- 沖縄県立埋蔵文化財センター2003 『首里城跡—右掖門及び周辺地区発掘調査報告書—』。
- 沖縄県立埋蔵文化財センター2005 『ナカダカリヤマの古墓群—急傾斜地崩壊危険地区内擁壁工事に伴う発掘調査報告書—』。
- 勝連町教育委員会 1990 『勝連城跡—北貝塚, 二の郭および三の郭の遺構調査—』
- 木戸雅寿 1993 「石鍋の生産と流通について」 『中近世土器の基礎的研究IX』 日本中世土器研究会, 127~143頁。
- 木下尚子 1996 『南島貝文化の研究・貝の道の考古学』 法政大学出版会。
- 木下尚子 2000 「開元通宝と夜光貝—7~9世紀の琉・中交易試論」 『琉球・東アジアの人と文化(上巻)』 高宮廣衛先生古稀記念論集, 高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会, 187~219頁。
- 木下尚子 2002 「貝交易と国家形成—9世紀から13世紀を対象に—」 『先史琉球の生業と交易—奄美・沖縄の発掘調査から—』 熊本大学文学部, 117~144頁。
- 木下尚子 2006 「ヤコウガイ交易の可能性」 『先史琉球の生業と交易2—奄美・沖縄の発掘調査から—』 熊本大学法文学部木下研究室, 201~219頁。
- 金武正紀 1982 『熱田貝塚発掘ニュース』 沖縄県教育委員会。
- 金武正紀 1989 「安里氏の断定に疑問 熱田貝塚の模倣土器」 『琉球新報』 11月16日付け朝刊, 琉球新報社。
- 金武正紀 2001 「陶磁器・カムイヤキ・滑石製石鍋からみた12世紀頃の沖縄」 『世界につなぐ沖縄研究 沖縄大会・シドニー大会』 復帰25周年記念第3回「沖縄研究国際シンポジウム」 実行委員会編, 沖縄文化協会, 98~102頁。
- 小林 茂 1974 「奄美諸島における近世—明治期のイネ栽培の変容過程」 『琉球弧の農耕文化—農耕の世界, その技術と文化(V)』 農耕文化研究振興会編, 大明堂, 10~42頁。
- 小林 茂 2003 『農耕・景観・災害—琉球列島の環境史』 第一書房。
- 狭川真一 2008 「城久遺跡群の中世墓」 『古代中世の境界領域 キカイガシマの世界』 池田榮史編, 高志書院, 199~212頁。
- 島袋春美 2004 「貝種別に見る奄美・沖縄諸島の貝製品」 『考古資料大観 第12巻 貝塚後期文化』 高宮廣衛・知念勇編, 小学館, 223~241頁。
- 新里克人 2004 「カムイヤキ古窯の技術系譜と成立背景」 『グスク文化を考える 世界遺産国際シンポジウム』 今帰仁村教育委員会編, 新人物往来社, 325~352頁。
- 新里克人 2010 「グスク文化開始年代をめぐる諸問題」 『沖縄県史 各論編3 古琉球』 財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室, 132~133頁。
- 新里貴之 2010 「南西諸島の様相からみた喜界島」 『古代末期・日本の境界 城久遺跡群と石江遺跡群』 森話社, 71~83頁。
- 新東晃一・青崎憲和・中村耕治・井ノ上秀文 1985 『カムイヤキ古窯跡群II』 伊仙町教育委員会。
- 鈴木靖民 1987 「南島人の来朝をめぐる基礎的考察」 『東アジアと日本』 歴史編, 田村圓澄先生古希記念委員会編, 吉川弘文館, 348~398頁。
- 鈴木靖民 2007 「古代喜界島の社会と歴史的展開」 『東アジアの古代文化』 130号, 特集古代・中世の日本と奄美・沖

- 縄諸島, 古代学研究所編, 大和書房, 20～45頁。
- 鈴木靖民 2008 「喜界島城久遺跡群と古代南島社会」『古代中世の境界領域 キカイガシマの世界』池田榮史編, 高志書院, 17～48頁。
- 鈴木康之 2007 「滑石製石鍋のたどった道」『東アジアの古代文化』特集古代・中世の日本と奄美・沖縄諸島 130号, 古代学研究所編, 大和書房, 96～108頁。
- 鈴木康之 2008 「滑石製石鍋の流通と琉球列島」『古代中世の境界領域 キカイガシマの世界』池田榮史編, 高志書院, 213～234頁。
- 澄田直敏 2010 「喜界島城久遺跡群の発掘調査」『古代末期・日本の境界 城久遺跡群と石江遺跡群』森話社, 57～70頁。
- 澄田直敏・野崎拓司 2007 「喜界島城久遺跡群の調査」『東アジアの古代文化』130号, 特集古代・中世の日本と奄美・沖縄諸島古代学研究所編, 大和書房, 46～52頁。
- 高梨 修 2000 「ヤコウガイ交易の考古学—奈良～平安時代並行期の奄美諸島, 沖縄諸島における島嶼社会—」『交流の考古学』現代の考古学, 小川英文編, 朝倉書房, 228～265頁。
- 高梨 修 2002 「知られざる奄美諸島史」『東北学』Vol. 6, 東北芸術工科大学東北文化センター, 132～147頁。
- 高梨 修 2004 「奄美諸島の遺構」『考古資料大観 第12巻 貝塚後期文化』高宮廣衛・知念勇編, 小学館, 275～284頁。
- 高梨 修 2005 『ヤコウガイの考古学』同成社。
- 高梨 修 2007 「『南島』の歴史段階—兼久式土器出土遺跡の再検討」『東アジアの古代文化』2007年冬号, 通巻130号, 特集古代・中世の日本と奄美・沖縄諸島, 古代学研究所編, 大和書房, 53～81頁。
- 高梨 修 2009 「土器動態から考える「日本文化の南漸」『沖縄文化はどこから来たか—グスク時代という画期』叢書・文化学の越境18, 森話社, 47～132頁。
- 高梨 修 2010 「列島南縁における境界領域の様相——古代・中世の奄美諸島をめぐる考古学的成果——」『古代末期・日本の境界 城久遺跡群と石江遺跡群』森話社, 85～130頁。
- 高宮廣衛 1997 「開元通宝と按司の出現(予察)」『南島文化』第19号, 沖縄国際大学南島文化研究所, 1～21頁。
- 高宮廣衛 2001 「沖縄諸島における城時代前夜の様相」『世界につなぐ沖縄研究 沖縄大会・シドニー大会』復帰25周年記念第3回「沖縄研究国際シンポジウム」実行委員会編, 沖縄文化協会, 575～580頁。
- 高宮廣衛 2002 「沖縄の考古学の現在 貝塚時代・ウルマ時代・グスク時代」『東北学』Vol. 6, 東北芸術工科大学東北文化センター, 202～220頁。
- 田中史生 2008 「古代の奄美・沖縄諸島と国際社会—日本・中国との交流をめぐる—」『古代中世の境界領域 キカイガシマの世界』池田榮史編, 高志書院, 49～70頁。
- 知念 勇 2004 「沖縄諸島の搬入品」『考古資料大観 第12巻 貝塚後期文化』高宮廣衛・知念勇編, 小学館, 271～274頁。
- 土肥直美・石田肇・埴原恒彦・譜久嶺忠彦 2001 「大泊浜貝塚出土の人骨」『沖縄県大泊浜貝塚』考古資料集27, 国立歴史民俗博物館春成研究室, 26～34頁。
- 土肥直美 2003 「人骨からみた沖縄の歴史」『沖縄県史 各論編2 考古』財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室, 575～610頁。
- 土肥直美 2010 「出土人骨が語る古琉球の人と生活」『沖縄県史 各論編3 古琉球』財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室, 50～65頁。
- 土肥直美・石田肇・埴原恒彦・譜久嶺忠彦 2001 「大泊浜貝塚出土の人骨」『大泊浜貝塚』考古学資料集27, 安里進・春成秀爾編, 国立歴史民俗博物館春成研究室, 26～40頁。
- 豊見山和行 2000 「冠船貿易からみた琉球王国末期の対清外交」『日本東洋文化論集(6)』琉球大学, 137～180頁。
- 中島恒次郎 2007 「大宰府から見た「喜界島」」『東アジアの古代文化』特集古代・中世の日本と奄美・沖縄諸島 130号, 古代学研究所編, 大和書房, 89～108頁。
- 中島恒次郎 2010 「城久遺跡群の日本古代中世における社会的地位——津軽石江遺跡群との相違を含めて——」『古代末期・日本の境界 城久遺跡群と石江遺跡群』森話社, 131～160頁。
- 仲宗根求 2004 「グスク時代開始期の掘建柱建物についての一考察」『グスク文化を考える 世界遺産国際シンポジウム(東アジアの城郭遺跡を比較して)の記録』今帰仁村教育委員会, 269～288頁。
- 中鉢良護 1992 「琉球の農業史の再構成のために—安里進の仮説の批判的検討—」『地域と文化 沖縄をみなおすために』第74号, 地域と文化編集委員会編, ひるぎ社, 2～20頁。
- 仲原善秀 1990 『久米島の歴史と民俗』上江州均編集, 第一書房。
- 新田重清 2003 「弥生～平安並行時代」『沖縄県史 各論編2 考古』財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室, 185～252頁。

-
- 永山修一 1997 「古代・中世における薩摩・南島の交流—夜久貝の道と十二島」『境界の日本史』山川出版社, 145～150頁。
- 永山修一 2007 「文献から見るキカイガシマと城久遺跡群」『東アジアの古代文化』特集古代・中世の日本と奄美・沖縄諸島, 130号, 古代学研究所編, 大和書房, 153～177頁。
- 永山修一 2008 「文献から見たキカイガシマ」『古代中世の境界領域 キカイガシマの世界』池田榮史編, 高志書院, 123～150頁。
- 那覇市教育委員会 1991 『御細工所』。
- 那覇市教育委員会 1994 『ヒヤジョー毛遺跡 那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書Ⅰ』。
- 那覇市教育委員会 1998 『銘苅古墓群 (Ⅰ) 那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書Ⅴ』。
- 比嘉春美 2004 「貝種別に見る奄美・沖縄諸島の貝製品」『考古資料大観 第12巻 貝塚後期文化』高宮廣衛・知念勇編, 小学館 223～241頁。
- 平良市教育委員会 1999 『住屋遺跡 (1) 一庁舎建設に伴う緊急発掘調査報告書一』。
- 宮古島市教育委員会 2006 『根間・西里遺跡 県道三, 四, 一六号市場通り線街路整備事業に伴う緊急発掘調査報告書』。
- 増田勝機 1974 「年中行事」『奄美文化誌』長澤和俊編, 西日本新聞社, 116～123頁。
- 松井 章 1997 「具志原貝塚出土の動物遺体」『伊江島具志原貝塚発掘調査報告書』沖縄県教育委員会, 159～187頁。
- 松井 章 2005 『環境考古学への招待—発掘からわかる食・トイレ・戦争』岩波書店。
- 南川雅男 2004 「琉球列島におけるイノシシの家畜化—化学分析より」琉球大学医学部主催シンポジウム「琉球列島の主役たち」(発表要旨)。
- 村井章介 2010 「古代末期の北と南」『古代末期・日本の境界 城久遺跡群と石江遺跡群』森話社, 1～11頁。
- 村井章介 2008 「中世日本と古琉球のはざま」『古代中世の境界領域 キカイガシマの世界』池田榮史編, 高志書院, 97～122頁。
- 森田 勉 1983 「滑石製容器」『佛教藝術』148, 佛教藝術学会, 135～148頁。
- 山里純一 1994 「琉球の布甲をめぐって」『日本古代史叢考』高島正人先生古稀祝賀記念論集, 雄山閣, 山里純一 1999 『古代日本と南島の交流』吉川弘文館所収, 6～21頁。
- 山里純一 1999 『古代日本と南島の交流』吉川弘文館。
- 吉成直樹 2010 「古代・中世期の南方世界—キカイガシマ・交易・国家—」『古代末期・日本の境界 城久遺跡群と石江遺跡群』森話社, 15～56頁。
- 吉成直樹 2011 『琉球の成立—移住と交易の歴史』南方新社。
- 吉成直樹・福寛美 2007 『琉球王国誕生』叢書・文化の越境 16, 森話社。
- ヨーゼフ・クライナー・吉成直樹・小口雅史 2010 『古代末期・日本の境界—城久遺跡群と石江遺跡群』森話社。

(沖縄県立芸術大学, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2012年9月26日受付, 2013年3月26日審査終了)

Three Issues Concerning the Ryukyu Islands during the 7th to 12th Centuries

ASATO Susumu

Archaeology in the late 20th century had considered the society of the Ryukyu Islands in the 7th and 8th centuries to be stagnant and primitive with a hunter-gatherer economy; a society left behind by the new state formations in East Asia. Since the mid-1980s, the study of bibliographical sources has given rise to an alternative view of the Southern Islands as having an advanced hierarchical society; however, until the late 1990s to the early 2000s archaeological evidence to confirm this hypothesis had not been found. The situation changed significantly with the “discovery” of several sites with massive quantities of turban shells, and the finds of archaeological digs at the early Ryukyu Royal Mausoleum Urasoe Yodore, and at the Gusuku sites on Kikai Island. The examination of Ryuku society in the 7th and 8th centuries, and the start of the Gusuku Era, and the formation of the Ryuku Kingdom is giving rise to heated debate. From among the contending arguments concerning the social image of the Ryuku Islands in the 7th to 12th centuries, this paper considers the following three issues: 1) explanations of sites with massive quantities of turban shells; 2) a theory of hierarchical society in the Amami Islands; and 3) Gusuku sites and the formation of the Gusuku culture and people. To broaden the possibility of the research on this unclear period, the paper also presents a hypothesis: centering on the Gusuku sites of the Kikai Island, where between the 9th and 12th centuries a “prototype of Gusuku society and culture” including farming techniques typical of the Gusuku Era was established; increasing population pressure due to the development of typical Gusuku farming led to a migration to the Ryukyu Islands throughout the 11th and 12th centuries, and the consequent ushering in of the Gusuku Era.

Key words: Sites with massive quantities of turban shells, turban shell trade, hierarchical society, Gusuku sites, Gusuku Era people